

# 聖徒の道 3 1976



末日聖徒イエス・キリスト教会

# も く じ

## 大管長会

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

## 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
デルバート・L・ステイプレー  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン、  
ボイド・K・バックー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト

## 諮問委員会

ハワード・W・ハンター  
デビッド・B・ヘイト  
ロバート・D・ヘイルズ  
O・レスリー・ストーン

## 教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

## 国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)  
キャロル・ラーセン (編集副主幹)  
ロジャー・ギリング (デザイナー)

## 「聖徒の道」

八木沼 修 一 (日本語コーディネーター)

|                  |                 |     |
|------------------|-----------------|-----|
| 感謝を神にささげん、予言者の導き | N・エルドン・タナー      | 153 |
| なお向学心に燃える女性      |                 |     |
| カミラ・キンボール        | ラビナ・フィールディング    | 156 |
| 特別な召し            | H・パーク・ピーターソン    | 159 |
| 決心さえすれば          | マーク・ハート         | 161 |
| モルモン経の発見         | マリオン・G・ロムニー     | 162 |
| セントジョージ神殿での結婚    | ヒーバー・J・グラント     | 164 |
| 金のせいしよ           | モーリーン・ピーチャー     | 165 |
| おもちゃばこ           |                 | 167 |
| がんばれ！ 山のとっぺんまで   | ヘーゼル・エム・トムソン    | 168 |
| 神さまがいらっしゃる       |                 | 170 |
| なにがかくれているのかな     |                 | 172 |
| 律法ありて            | ハリー・J・ホルドマン     | 173 |
| 改宗の過程とは          | ハートマン・レクター・ジュニア | 177 |
| ローカル・ニュース        |                 | 182 |

## 聖徒の道 3月号

|     |                                            |
|-----|--------------------------------------------|
| 発行所 | 末日聖徒イエス・キリスト教会<br>東京都港区南麻布 5-8-10          |
| 配 送 | 東京ディストリビューション・<br>センター<br>東京都港区南麻布 5-10-25 |
| 定 価 | 年間予約1,700円 1部 150円<br>海外予約1,700円           |

恐らく、歴史上今ほどこの歌詞の意味が深く認識されたことはなく、また今日ほどこの歌詞の言わんとする事柄を必要とする時代もないであろう。人々は、自分自身の問題について、また世の中の問題について、答えを求めて暗中模索している。だが、その努力も実を結んでいない。実際、はい出ることのできない泥沼に次第次第に深くはまり込んでいるのである。

あらゆる人々がこの末の世にあって導きを得るために、神の予言者に心を向けてくれたら、と願わずにいられない。私たちが平安な世の中に住むことができれば、それは何と輝かしいことであろうか。あらゆる人々がその同胞の向上のために貢献し、だれひとりとして自己の栄達を求める者がない。それぞれが、人生と自由と幸福とを義しく追い求めている。そんな世の中である。私たちは、これこそ神が私たち、霊の子供たちに望んでおられることであると、再三再四強調してきた。また同時に、私たちのふるさとである神のみもとに帰るためには、予言者を通してもたらされる神のみ言葉に従順でなければならないと、絶えず力説してきた。

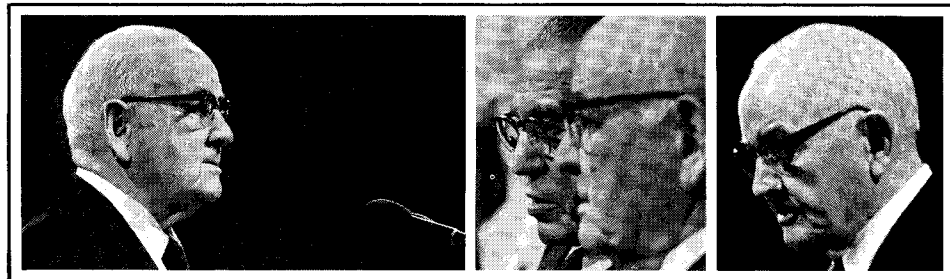
1976年3月28日は、現代の予言者であり指導者であるスペンサー・W・キンボール大管長の81回目の誕生日にあたる。彼の偉大な生涯から、彼の善良さから、彼の謙遜さから、また主のために身をささげるその献身ぶりから、私たちはどれほど多くの祝福を受けていることであろうか。またどれほどそれに感謝していることであろうか。まことに彼は主の僕であり、ベンジャミン王の教えのひな型である。「お前たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのである。」(モーサヤ2:17)

彼の生涯とその業績を振り返ってみると、彼が無数の人々に偉大な影響を及ぼしていることがはっきりとわかる。彼は世界中を旅して、人々の心に、新聞に、雑誌に、ちらしにと、彼のメッセージを残してきた。彼の言葉は、社会のすみずみにまで宣べ伝えられている。老いも若きも、富める者も貧しい者も、そして博学の者も無学の者もその恩恵に浴している。予言者の勧告に従う人は、あたかも予言者の言葉が根をおろし、そこから養分を吸収して

# 感謝を神にささげん 予言者の導き

第一副管長

N・エルドン・タナー



成長するように、以前よりはるかに幸福に、また豊かになり、愛され、尊敬されるようになるであろう。そしてさらには、永遠の生命という大きな目標に向かう備えもできるのである。私はこれを確信している。

ここで私たちの愛する大管長が与えて下さった偉大なメッセージの中からいくつか抜粋して再度紹介するのも時宜にかなったことであると思われる。

1955年、ブリガム・ヤング大学において、当時十二使徒評議員会会員であったスペンサー・W・キンボール長老は「悲劇か運命か」という題で講演した。彼は、悲劇の事例を数々挙げ、人がその寿命よりも早く死んだと思われる例、そして遺族が「主はなぜそのようなむごいことが起こるのを許されるのか」と尋ねている例などについて話をした。そして、示唆に富んだ質問を若

干した後、次のように語った。

「早死することが不幸であり、災難であり、悲劇であると言うのなら、では寿命が尽きる前に霊界に入り、そして最終的な救いと昇栄を得ることよりもこの世にとどまる方がもっと好ましいことであるとでも言うのであろうか。もしこの世で生き続けることが完全な状態であるのなら、死は失望でしかあり得ない。だが福音の教えによれば、死には何ら悲劇はなく、悲劇は罪の中にのみ存在するのである。

私たちの知識は少ない。私たちの判断力も限られている。私たちはしばしば主を裁くことがあるが、その知恵は、最年少の子供が親の決めたことについてとやかく言う、その知恵にも遠く及ばない。……

私たちの生活を支配しておられるのは神である。また、私たちに導きと祝福を与えてくださるのも神である。だが神は同時に自由意志も与えられた。私たちは、主が私たちのために立てられた計画に従って寿命を全うすることもできるし、また寿命を縮めるという愚かなこともできるのである。私は主が私たちの運命を定められていると確信している。私たちは寿命を縮めることはできるが、延ばすことはほとんどできないのではないかと私は考えている。私たちが完全に理解できる日がいずれ来るであろう。そのときはなかなか理解できないような出来事でも後になって振り返ってみるときに、その中の多くに満足を覚えることであろう。」

次のような勧告にも耳を傾けよう。1974年7月10日、ユタ州マンタイで行なわれたユタ中央部のステーク部ヤングアダルトの会合で話されたものである。

「これまで海洋のただ中で、船同士の衝突により、また時には冰山との衝突により、数々の惨事が起こっている。そしてそれに伴い、数多くの人々が命を失った。

だが、間もなくそのようなことも起こらなくなるであろう。各船舶がレーダーを装備し、衝突の危険が迫った場合、乗組員に警報を発するようになるからである。録音テープが自動的に作動して、暗闇迫る船橋から『警報発令、本船は障害物に接近中。警報発令、本船は障害物に接近中』と叫ぶ声が響き渡ることであろう。その声は、航海士

がレーダースコープのところへ来て、テープを止めるまで叫び続ける。こうして、船はその進路を変更し、乗客の生命が守られるのである。

私は、教会の若人が健全であり、かつ根本的に善良で穏健であると信じている。しかし不完全な海図しか持たずに大洋を航海することもあるのである。浅瀬があり、岩礁があり、冰山があり、他の船舶もある。警告に従わずに進んで行けば、必ず大惨事を招くのである。

教会の指導者として、また青少年とその福祉に多少の責任を持つ者として、私は声を大にして青少年に次のように申し上げたい。『あなたたちは警戒水域におり、危険の多い年代を過ごしている。安全ベルトをしっかりと締めなさい。固く締めておきなさい。そうすればこの混とんとした世にあっても生き残ることができるであろう。』

ここで主のみ言葉を引用してみよう。

『もしわたしがきて彼らに語らなかつたならば、彼らは罪を犯さないですんだであろう。しかし今となっては、彼らには、その罪について言いのがれる道がない。』（ヨハネ：15:22）警告が与えられた場合、私たちはそれに耳を傾け、生活に取り入れるべきである。また、浅瀬や岩礁や危険水域を避けなければならない。』

ここで、キンボール大管長が大管長に就任して以来、総大会で話した靈感あふれる説教の中から少し引用して再度注意を促したいと思う。1974年4月5日金曜日の大会の冒頭で、キンボール大管長は、故ハロルド・B・リー大管長の逝去に触れて弔辞を述べたあと、次のように言った。

「記者会見では、例にもれず、『大管長、教会を指導する立場に立たれましたが、これからどうなさいますか』と尋ねられた。

私の答えはこうであった。十二使徒評議員会として過去30年間、私は現在ある包括的で完全なプログラムの編成や方針設定にわずかばかりだが関与してきた。私は近い将来に、これら一連のプログラムに大幅な変更が加えられるとは思っていない。だが既存のプログラムの幾つかに特に力を入れたいと望んでいる。今は、私たちの努力をさらに結集し、プログラムを強固なものとし、方針を再確認する時である。

私たちは、今教会の最大の問題が急速な発展にあることを認めている。教会員数の増加ぶりは異常とも言うべきで、ここ数年で倍増している。……しかし数字は二の次である。まず大切なことは、すべての人が永遠の生命を得ることである。」

続いてキンボール大管長は、私たちの急を要する問題について説教を進めた。その中で、国民としての義務、世に打ち勝つこと、神に従うこと、家族の一致団結、家庭における指導力、離婚、堕胎、麻薬の常用、肉体の不適切な使用、母親の神聖な役割などの問題が説教の対象となった。そして、最後に次のようなチャレンジをして説教を結んだ。

「これが私たちのプログラムである。再確認をし、神のみ業を清く、まっすぐに、大胆に押し進めること、そして神を敬う生活を切に必要としている世に、この真理の福音を伝えることである。永遠の生命が私たちの目標である。それは、主が私たちに示して下さった道に従うことによってのみ得られる。」

この同じテーマに基づいて、キンボール大管長は、1974年4月4日の地区および伝道部代表に対する説教で次のように激励した。

「現在のステーク部の伝道活動は、まだまだ始まったばかりとしか言えない。……

私たちはこうした考え方を改め、マッケイ大管長の言われた『すべての会員は宣教師』という理想に近づくことができる。マッケイ大管長の言葉は靈感によって与えられたものである。

私はこのメッセージが新しいものではないことは百も承知している。これまでも何度かこのテーマで話してきた。だが私は今、その責任を遂行しなければならない時が到来したと確信している。照準を変え、より高い目標を掲げなければならないと考えている。

教会が組織されている地域から送り出される宣教師の数が増加して可能性の極限に近づくとき、すなわち教会の資格ある少年がすべて伝道に出るとき、それは海外のステーク部や伝道部がひとつ残らず、自国で働くに十分な数の宣教師を自力で供給するときである。また新しい地域で伝道を開始するにあたり、使徒を助けるためにふさわしい人が働くときでもある。さらに通



信衛星やそれに類する発見もかなりの程度まで進み、あらゆるメディア——新聞、雑誌、テレビ、ラジオ——が最もその力を発揮するときである。またおびただしい数のステーキ部が組織され、これがさらに大きな飛躍への土台となるであろう。さらに今まで神権を受けていない若人、また伝道にも出ておらず、結婚もしていない大勢の若人を不活発な状態から引き上げることであろう。このような状態が訪れた暁には、いや、訪れてはじめて、私たちは『全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ』という主の命に近づくのである。

兄弟たちよ、私は、キリストの福音に対して門戸を開く国には、すべて主の祝福が臨むことを確信している。その祝福は天にあげられたエノクの市のように、教育に、文化に、そして信仰や愛に流れ込んでいくであろう。そしてあたかもニーファイ人の200年間の平和な日々の如くなるに違いない。国は繁栄し、人々には安らぎと満足がもたらされ、喜びと平安はあらゆる人々に与えられるであろう。そして福音の教えを全力を尽くして実践する人は永遠の生命を受けるのである。」

大管長は、教会幹部の兄弟たちに常に思いやりと親切とを示し、また彼らにとってこの上ない支えとなっている。その大管長が、1974年4月7日、日曜日の年次総大会最後の説教で次のような話をした。

「兄弟姉妹たち。この偉大な大会も今やその幕を閉じようとしている。私が今申し上げたように、あなた方はほとんどの教会幹部から話を聞いた。彼らの証は靈感に満ちたものである。彼らが話したことは皆真実であり、彼らの心の奥底から湧き出たものである。彼らもそう証するであろう。そしてそれが真実であることを知っている。彼らは、天父から遣わされた真の僕なのである。私はあなた方がこれによく耳を傾け、よく記憶し、さらにここで話された数々の真理の教えをそれぞれ家庭へ持ち帰り、自分の生活の中で、そして家族の中で生かして欲しいと祈ってやまない。

兄弟姉妹たち、私はこれらの予言者たちの証に私の証を加えたい。私は主が生きておられることを知っている。また、主にまみえることができ、主と

共にいることができることを知っている。主の戒めを守って生活し、主に命じられ、幹部の兄弟たちに促された事柄を行なうならば、私たちはいつも主のみそばにとどまることができるであろう。」

1974年10月の総大会において、キンボール大管長は、極めて感動的な説教をして、全教会員が美化キャンペーンに参加するよう協力を求めた。私たちの家屋、建造物、またそれを取り巻く環境を清潔に、また美しくしておくよう勧告したのである。そして、様々な誘惑や脅威を列举し、それに対する警戒を促した後で次のように言った。

「忘れないでいただきたい。神は天にまします。神は地球を組織されたとき、目的をもっておられた。そして今も同じくみむねを行っておられる。神の戒めを破る者は自責と苦痛のうちに陥がみし、苦しむであろう。神が欺かれることはない。人が自由意志を持っていることは確かである。しかし、神は決して欺かれない。(教義と聖約63:58参照)

天父の律法に厳密に従って生活するよう、ここに勧告するものである。」

次の文は、1974年10月6日、日曜日の午後に行なわれた最後の説教から抜粋したものである。大会では家庭と家族というテーマで数多くの説教が行なわれてきたが、この大管長の説教は正にその極をなすものと思われる。

「家庭というものは、何の抵抗もなく日常、主に頼ることのできる場所となければならず、何か特殊な場所となってはならない。そうした家庭をつくるためのひとつの方法は、毎日、熱心に祈ることである。ただ祈るだけでは十分ではない。親である自分が知らなければならぬことと家族のためにしてやらなければならないことについて、主が必ず啓示を下さるという信仰を持って、実際に主に話しかけることが大切なのである。ある人が祈っていると、子供が目を開けて、主が本当にそこにおられるかどうか見たがったという。それほど直接的で率直な祈りだったのである。……

兄弟姉妹たち、家庭は私たちの宝である。家庭そして家族は、私たちの依って立つ基盤である。そのことを、今度の大会では幾度も聞いた。家庭生活についての、また互いに愛し合い頼り

合う親子についての話を聞いた。それこそ、主が私たちのために計画された生き方である。……

イエスはキリストであり、生ける神の御子である。私はそれを知っている。私たちの教える福音がイエス・キリストの福音であり、私たちの所属する教会がイエス・キリストの教会であり、この教会がイエスの教義を、イエスの方針を、そしてイエスの計画を教えていることを、私は知っている。もし私たちが皆、主からすでに与えられた計画や将来与えられる計画にそのまま従ったならば、すべての約束された祝福は成就するのである。」

私もまた、これらのことが皆真実であることを、そしてスペンサー・W・キンボール大管長が、今日この地上における神の予言者であることを知っている。願わくば、私たちが皆こぞって「感謝を神にささげん、予言者の導き」という呼びかけに答えるよう、またその予言者が私たちと共にいることに感謝をささげることができるよう、祈ってやまない。

◇ ◇

(p.154)

「早死することが不幸であり、災難であり、悲劇であると言うのなら、では寿命が尽きる前に霊界に入り、そして最終的な救いと昇栄を得ることよりもこの世にとどまる方がもっと好ましいことであるとも言うのであろうか。もしこの世で生き続けることが完全な状態であるのなら、死は失望でしかあり得ない。だが福音の教えによれば、死には何ら悲劇はなく、悲劇は罪の中にのみ存在するのである。」

(p.155)

「ただ祈るだけでは十分ではない。親である自分が知らなければならぬことと家族のためにしてやらなければならないことについて、主が必ず啓示を下さるという信仰を持って、実際に主に話しかけることが大切なのである。ある人が祈っていると、子供が目を開けて、主が本当にそこにおられるかどうか見たがったという。それほど、直接的で率直な祈りだったのである。」



なお向学心に  
燃える女性

カミラ・  
キンボール

ラビナ・フィールディング

彼女は物静かな女性である。しかしその静かさは消極さや無関心からくるものではない。訓練を通して得られた心の平安がそうさせるのである。その髪は白いが、ブルーの瞳は生き生きと希望に輝いている。その名は、カミラ・アイリング・キンボール。

彼女の生活が夫や子供や孫たちを軸とし、教会の奉仕が中心であることは無論である。あのように素晴らしい女性であることのひとつの理由がその若々しい精神であることも、だれもが認めることである。その向上心が、彼女を生涯かけての勉学のとりことした。彼女は今もなおしたいことが山ほどあり、どう時間を調整するかで苦労している。

彼女の家庭はつつましく、しみひとつなく清潔で、非常に快適である。居間の椅子と食堂のテーブルのまわりに置かれた椅子には、丹念に刺繍されたみごとなクッションがあるが、彼女はそれを、上手ではなくただ時間をかけただけですとひかえめに語る。温室に置かれた草花を見ると、冬の寒さにさらしたくないという彼女の気持ちがよくうかがえる。しかし彼女の趣味は読書である。「本を1冊貸していただければ、いつまでも楽しめますよ」と言う。「子供の頃は、まわりのものを手あたりしだいに読みあさりしました。本に関してはとっても貪欲だったんです。」

スイス出身の改宗者であった彼女の祖母は、小説を読むのを「悪いこと」と考えていたが、その祖母と一緒に過ごした夏のことを彼女は今も覚えている。若いカミラは夕食を終えるとすぐに二階へ上がり、階段に祖母の足音がするまで本を読みふけていた。そして祖母が二階に上ったときには、カミラはいかにも前から寝ていたかのように目をつぶってベッドに横になっていた。また、祖母は早起きをして庭仕事をしたが、カミラは朝も食事ができるまでの間本を取り出すのだった。祖母が、「カミラ、あなたはなんでそんなに眠りたがりやなのでしょう!」とこぼしていたのを、彼女は今も覚えている。

カミラは大家族の長女として、母親の片腕だった。「母は寝室の片づけに私をよく二階へやりましたが、それも読書に絶好のチャンスでした。『カミラ、まだベッドはきれいにしないの』と声をかけられて、あわてたものです。」

キンボール大管長は自分でピアノを弾くが、カミラ姉妹の方は両親にならったオルガンも腕は上がらなかった。彼女はいつも譜面台に本を立てかけて、「練習の合間に読書しながら、母を満足させる程度に弾いていました」と言う。

実のところキンボール姉妹の読書熱は身につくべくしてついたものである。母親が大の読書好きで、キンボール姉妹は母親が家族みんなのために靴下を編みながら本を読んでいたのをよく覚えている。「どこにいても本、本、私たちが本を持っていなかったことなんて思い出せないですよ。」

キンボール姉妹の読書欲がいかに旺盛とは言え、くだらない本と良い本との区別ははっきりしていた。「一番の厄介は、長男に漫画を読んであげることでした。できるだけ早く読み方を覚えさせたいと思って早くから教え始めたので、5歳の頃にはもう本が読めるようになりました。」

しかし読書の自由よりもっと貴重だったのは、福音の中で思想を探る自由が与えられていたことだった。彼女はこう回顧する。「高校2年のときでした。教師が進化の話を

し、私はとってもびっくりにして、家に帰ると両親にそのことを教えました。父はじっくり私の話を聞いてから、こう言ったのです。『ねえ、カミラ、学説はある。そして真理もある。おまえが辛抱強く待ったなら、真理と学説の区別がわかるようになるさ。』

父はちっともおおげさに反対せず、不愉快な気持ちにもさせませんでした。それが、あれからの私の生き方の基盤になりました。大学では栄養学を専攻しましたが、栄養学の分野でもこの60年間にたくさんの変化があって、学説というものは変わらないものではないんですよ。でも福音は変わりません。そのことは完全にはわかっていないかもしれませんが、でも努力を続けていけば、いつか完全に理解できる日が来ると、そういう信仰が持てるのですよ。」

キンボール姉妹の次の言葉からは、研究心や向学心の旺盛な家風がうかがえる。「私はいつも、どうしてかと考えていました。物事をただ受け入れることに満足しないのです。そのことを十分に調べ尽くして納得したいのです。でも福音についてすぐには解決できない疑問もたくさんありました。そんなときはそのままにしておきました。そういう態度は小さいうちから身についていました。そして、成長して勉強したり祈ったり考えたりしていくうちに、ひとつずつよく理解できるようになりました。」

彼女は笑いながらこのように言う。「今でも棚上げになっている疑問はありますけれど、これまでにたくさんの疑問が理解できるようになったので、まだわからない疑問も喜んで答えを待とうと思うんですよ。」

そのような疑問が理解できたときのことを、彼女は敬虔な様子で話してくれた。テンプルスクウェアのガイドをしていた当時、彼女は宣教師としての責任を真剣に果たしていた。ところがある朝、着替えて出かけようとしていたときに、急にそれまでの彼女の信仰を粉々にしてしまうようなひとつの疑問が湧いてきた。「『ジョセフ・スミスが実際に救い主と御父を見たことは、どうしたらわかるのかしら。』」そのことが実際に起きたと、どうして厚かましくも言えるのかしらと思ったんです。なんだかとても着落がなくなっていて。ひざまずいて祈りましたが、家を出るときも、まだその疑問で心がいっぱいでした。

ところがいつものようにその日、前に立ってジョセフ・スミスの話をしようとしたときに突然啓示があったんです。あ那时的気持は今でも忘れられません。心が熱く燃えました。本当にはっきりした答えだったので、それが求めて心から知りたいと思う人に約束されている証だということを、私は何の疑いもなく信じられたんです。

自分でも驚いたのは、それまではそんな疑問を一度も感じなかったことです。その証は、私にとってごくごく当然のことでした。それが、疑問が湧いて同じ日に答えがあったんです。私は少女でもありませんでしたし、れっきとした大人で、結婚してから何年もたっていたんですよ。」

彼女は教師として、生徒として、自分の召しを懸命に果たしながら、常に新たな知識を身につけている。自分のワード部で「この20年間」扶助協会の霊的生活の教師をしながら、姉妹たちに指定の標準聖典を年に1冊読み通すチャレンジをいつも出していて、チャレンジを果たした人を楽しい午餐会に招待している。あるときには72人の姉妹が1

年でモルモン経を読み通し、その中で3回読んだ人が12人もいと言う。キンボール姉妹は言っている。「いつもどんな結果が出るか胸をわくわくさせているんです。何人もの姉妹が『チャレンジをありがとう』と言って下さいます。たいていの人は、少なくとも私はそう思うんですけど、勉強するように刺激を与えてくれるものを感謝して下さるのではないのでしょうか。」彼女は最後に、「だれかが私をもうちょっとつついてくれたらって思っているんですよ」とつけ足した。

カミラ姉妹にはもうひとつ、教える機会がある。家庭訪問教師である。「50年以上も扶助協会に籍を置いていますから、家庭訪問も50年以上してきたことになりますね。」彼女は誇らしげに言う。「家庭訪問は最も素晴らしい機会と言えるのではないのでしょうか。同僚と親しくなって問題を抱えている人たちをお手伝いして、ひとりの姉妹を本当に知るには、その方のお宅に実際に伺ってこそだと、私は思うんですよ。家庭訪問のおかげで、お互いに親しくなって助け合う機会があるんですものね。」

キンボール姉妹はそのような友情を大切にしている。というのも、世界有数の科学者ヘンリー・アイリングの妹、スペンサー・W・キンボールの妻として、彼女の人柄よりも名前を重んじる人々がいるからである。彼女は、予言者の奥さんでいらっしゃるんですが、と聞かされると、いつも冗談めかして返事をするが、その言葉は的を突いている。

「私は予言者と結婚したんじゃないやありませんよ。帰還宣教師と結婚したんです。」そしてまたスペンサー・W・キンボールは予言者の妻と結婚したのではなかった。彼は食欲なまでの知識欲と雄々しい精神を持った快活な教師と結婚したのである。彼らは、それぞれやり方は違っても互いに励まし合いながら一緒に成長し続けた。

彼女は、もし夫が30年以上も教会幹部に召されることがなかったとしても、「今と違っていることは何もないでしょう」とはほえみながら語る。「夫はいつも心底教会に献身していました。結婚したてのときからずっとそうでした。ワード部の書記だったとしても、きっと同じように熱心に働いていたでしょう。」実際に彼は、結婚2カ月後にステーク部書記に召されている。

彼らの生活でたったひとつ人と違うものは、大管長の召しに伴ってやってきた非常に重い責任である。「夫は今の地上での権能の最終的な拠り所です。」夫人は穏やかに語る。「そのように召されているんです。とてもたくさんの決定について最終的な責任があるんです。夫の頼るところは主以外にないのですよ。」

キンボール姉妹は家庭を「本当に心の落ち着く平和なところ」にして、その荷を軽くしようと努めている。「夫の健康についてはできるだけのことをして、家の仕事はしなくてもよいように。そうなんです、夫を守ってあげたいと思っています。夫にとって、『いいえ』と言うのは一番むずかしいことですし、私はいつもそんな張りつめた状態にいる夫を見るのがつらいのです。」もうひとつ大変なのは、どうしても知名度が高くなっていくということである。

「社交的」でない彼女は有名になることを嫌い、人前に出たり会話をしたりということはできるだけ避け、自分や夫のプライバシーを大事にしている。

キンボール夫妻がよく行なう家庭の夕べは、ゆったりとした椅子にかけて、一緒に聖典を勉強することである。キンボール大管長ののどをかばって、姉妹が声を出して読み話し合いたい所や線を引きたい大事な箇所があったら中断する。これまで何回も読み、何回も線を引いたので、印のない箇所がめずらしい位だと言う。

「彼は気さくな人ですよ」と、キンボール姉妹は温かく言う。彼女はキンボール大管長の「確かな信仰と絶対の忠実」を讃え、思考のしかたの違いは、ふたりの長い友情をひきしめてくれるコショウのように好ましいものだと語った。「私は例によって、何でもなぜかと詮索するのが、彼にはまだあまり理解できないんです。夫にとって、福音は何の疑問もないものなのですよ。」

それでも、彼らがお互いの人格を絶対に尊重していることは、はためにも明らかである。その第一の理由は、お互いの高潔さに対して全く疑いを持たないことから来る互いの人格への深い信頼である。姉妹はこう語る。

「こと善悪の原則になると、私たちは完全に一致します。ふたりともキリストがどのようにして全人類の罪を引き受けられたのかはわからなくても、贖罪が現実のことだと知っています。私こそときどき、本当にそういうことが起きたのかしらと思うことはありますが、夫はそれがすっかりわかるときまで、安心して待つ人です。でも福音をいろいろな状態にどう応用するかについての意見は、たとえば政治にね、いつも同じわけではありません。そういうときはそれぞれ自分のやり方で答をみつけます。どちらかが相手の考えを受け入れなければならないということはありません。じっくり話し合えば、『信仰の一致に到達』するんですよ。」

この相互の信頼と尊敬は、結婚当初からの彼らの生活の特徴だった。キンボール姉妹は、知的な関心を持つところから各種のクラブや市民グループや研究グループ、教室などによく参加してきた。「ここ2年ほど旅行が多くなるまでは、結婚以来毎年何かのクラスを取っていました」と彼女は話す。

しかし、それらの活動に熱心なことが即、彼女が家庭を刺激のない場だと考えていることにはならない。「妻や母という仕事をつまらないと思う人は、毎日のチャレンジを真剣に考えていないのだと思いますよ。家庭は最大の学ば場です。学べるものを全部学び取るのに、今の倍働かなければならない位です。勉強には終りがありません。子供にはどういうふうに話をしたらよいか、それからもっと後になれば、良いしゅうとめ、良いおばあさんになるにはどうしたらよいかってね。」

キンボール姉妹の向上へのあくなき努力は、姉妹自身を発奮させるだけでなく、接する人々にも刺激を与える。彼女は言う。「責任に押しつぶされるように感じている人たちがいるでしょう。義務を果たすことは成長の一番てつとり早い機会、一番良い方法だと思うんですよ。女の人たちはこうした機会に敏感でなければならないと思います。社会の関心事、自分の家庭、教会の奉仕を通じての成長に。人生ってとてもおもしろいですよね。何もかも全部できるといふわけにいかないのが、困るんですけど。人生はつまらないという女性たちには、やきもきしちゃいます。」



私たちは皆、キンボール大管長のはっきりとした呼びかけを聞いた。大管長は兄弟たちに宣教師となる準備をするようにと言われたのである。これまで私は各地の教会で若人たちに会ってきたが、そのたびに深い感銘を受けている。主のみこころにそって必要なことであれば何でもしようという若人がいつでも無数にいる。彼らは、心から主に献身し、指導者の勧告に従うつもりでいるのである。

例を挙げよう。最近私は日系のある

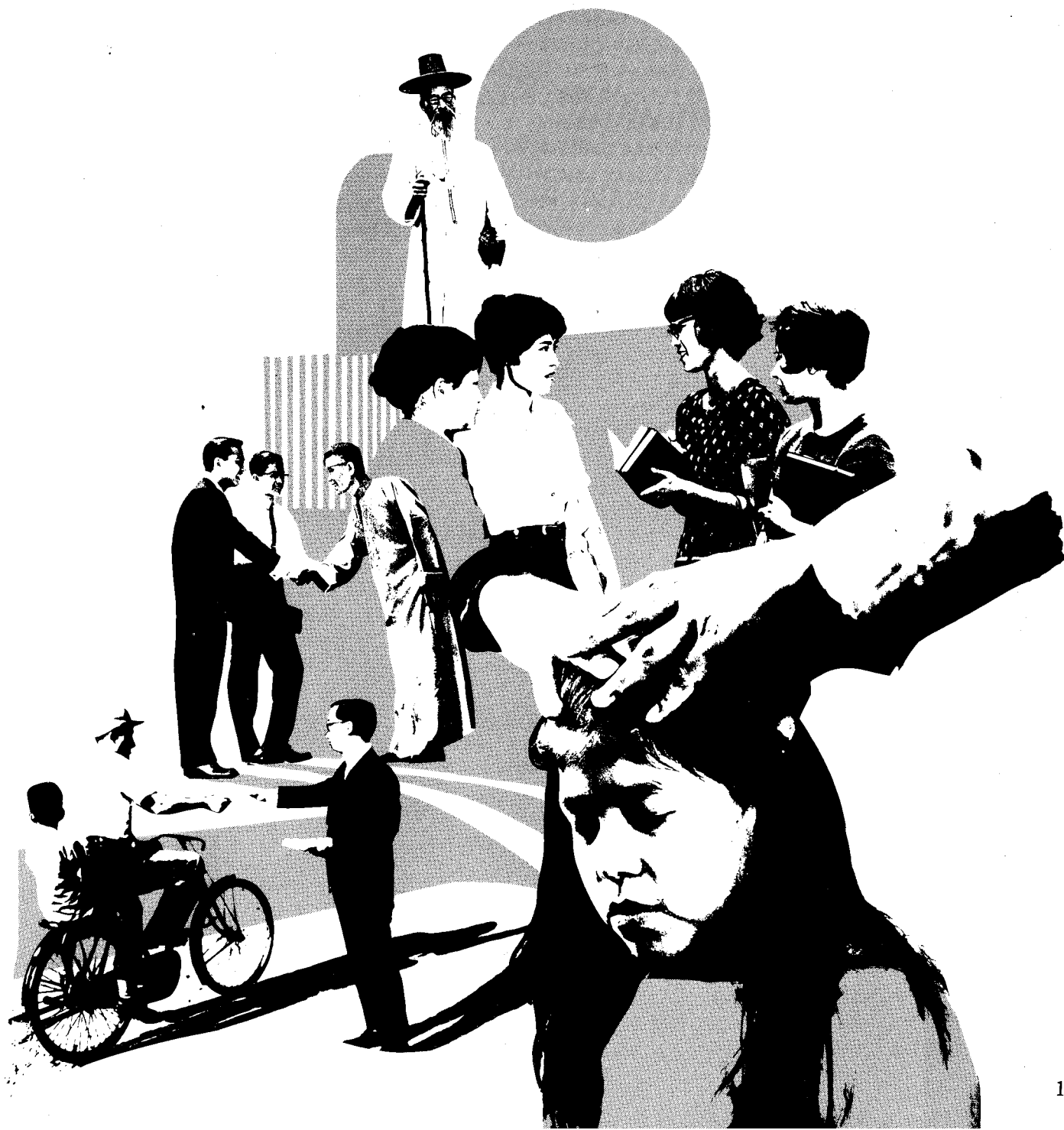
## 特別な召し

管理監督会第一副監督

H・パーク・ピーターソン

青年に会った。彼は数人の末日聖徒の青年とつきあっていたが、彼らは、モルモンらしく行動することをいささかの恥とも思わない青年たちであった。

その結果、彼は宣教師のレッスンを聞くことにした。その後、バプテスマを受けるよう勧められた。彼の両親は息子が間違ったことをしているのだと考えたが、もし教会に加入したとしても、すぐにあきて、熱もさめるだろうと感じた。そこで、両親は一応承諾しその青年はバプテスマを受けた。



ところが教会へ入って間もなく、彼は両親に伝道に出たい旨を話し、伝道中に両親からの援助をもらえるかどうか尋ねた。もちろん、両親にはそんな気はさらさらなかった。彼らには、息子のしていることが信じられなかったからである。彼らは、学校を休学することがいかに愚かなことであるか、彼に説いて聞かせた。彼が医者になるための勉強もやっと軌道にのりかけたばかりだからと言うのである。だが彼はどうしても伝道に出たいと思い、自分で貯金をし、何人かの友人からも援助を受けることにした彼に届いた召しは、韓国伝道部で働くようにという召しであった。この青年は伝道中の出来事を話してくれた。まだ伝道に出て数カ月しかたない頃、両親が彼を韓国まで訪ねて来た。父親が彼にこう言った。「もうこれ位で十分だろう。これまで我慢してきたし、理解もしてやっている。さあ、家へ帰って勉強を始めようじゃないか。」両親は彼を家へ連れて帰ろうとした。だが、彼は家へ帰ることを拒んだ。自分のしていることが真実であり、正しいことなのだから、韓国人の人々のもとを去ることができないと言うのである。彼は、主から韓国へ行くよう召されたのである。そこを去るわけにはいかなかった。

その青年の両親は、大そう裕福であった。父親は息子に、学資を全額出そうと約束した。だが息子はことわった。宣教師の責任を放棄することができなかったのである。彼がそのときしていたことは、医者になることよりも、もっと大切なことであった。すると父親は彼に、もし今伝道をやめて一緒に家へ帰らないのなら、勘当してしまうと言った。だが彼はそれでも伝道をやめるわけにはいかなかったのである。

そしてその宣教師は、彼の家族がいかにして彼を勘当し、彼をしめ出したのか、それを私に話してくれた。伝道を終えて帰国した彼には帰れるはずの家がなかった。彼は大学へ戻り、現在、学資を稼ぐために働いている。この青年も、予言者の指導や助言に従うためなら、何でも必要なことはする、という青年のひとりである。教会員であることを決して弁解しない人々が存在する。救い主の宣教師になるために必要な準備をすべてなし、その召しが来るのを待っている人々も存在するのである。

伝道に出る決心をした人々のために、またその準備をしている人々のために、そして、まだ決心をしていない人々のために、私が教会幹部として得た最も素晴らしい体験についてお話ししたいと思う。それは、伝道の業に従事している聖徒たちと接した体験である。私たちは管理監督会にあって多くの偉大な経験をしている。だが各伝道部を訪れ、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるために自分の時間を捧げている若い兄弟姉妹と接することほど、私に喜びをもたらし、また私を霊的に高めてくれるものは他にない。私は、この地上にあって他のだれにも与えられないような祝福が宣教師たちに与えられるのを見てきた。宣教師たちは主の目から見て特別な人々である。そして主は、他の子供たちには得られない、特別のものを宣教師たちのために用意している。義しい宣教師は、他の人の得られないような権威と権能と祝福を受ける。主の業の中で最も胸が躍るもの、それは宣教師になることである。

数年間、私は合衆国内で監督をしていた。私たちのワード部の中に、数人の若人がいて、彼らは末日聖徒としてなすべきことをなして、素晴らしい模範になっていた。彼らは、十代のある女の子と知り合いになった。彼女はまだ教会員ではなかった。この女の子は耳が聞こえなかったが、唇の動きを読む訓練は積んでいた。この子の真つすぐ前に立って話しかければ、唇の動きから、しゃべっている内容を理解するのである。彼女は心臓疾患も持っていて、他の女の子たちと一緒に運動することができなかった。

モルモンの少年少女たちは、この女の子に親切であった。思いやりを示し、よく理解してやっていた。彼女も彼らの模範が好きだった。間もなく彼女は宣教師の紹介を受け、レッスンを受けるようになった。そしてレッスンが全部終わると、彼女は自分が教えられたことを皆信じ、彼女の両親にバプテスマを受けてよいかどうか尋ねた。両親もレッスンを全部聞いたが、娘のように真理を受け入れることはなかった。だが、娘にバプテスマを受ける許可を与えた。

ある土曜日の午後、私たちはバプテスマフォントの回りに集まり、この耳

の不自由な女の子は水に入った。バプテスマを施された後で、彼女は教会員として確認される予定であった。長老たちが、私と一緒に円陣の中に立ってくれるように言って来た。私はもちろん承知した。私は彼女には長老の言う確認の言葉や祝福の言葉を聞くことができないことを知っていた。唇の動きを読むことができないからである。それで私は、長老が彼女を教会員として確認するとき、その祝福の言葉をできる限り細かく憶えておこうと考えた。儀式を終えた後で、その内容を教えてあげたかったからである。

私はその長老の言った言葉を聞いたときわが耳を疑った。私には決して起こりそうに思えないようなことをいくつか宣言したからである。だが彼は、自分が授けた祝福を主がかなえて下さると信じて疑わなかった。

確認と祝福が終わった後、私はこの女の子を監督室へ招き入れた。彼女は私の前に腰をおろした彼女を見て私はこう言った。「これから、長老があなたに与えた祝福についてお話ししましょう。」彼女は私を見て、言った。「ピーターソン監督、私は祝福が聞こえました。」それ以来、彼女の耳は聞こえるようになった。もう耳が不自由ではなくなったのである。またそのとき以来、彼女はバレーボールもソフトボールもテニスもするようになった。心臓の病も癒されたからである。この癒しは皆、あの長老の信仰と証と勇気の故にもたらされたものである。天父の特別な祝福は、しばしばふさわしい宣教師に、そして伝道生活に誠心誠意携わる人々に与えられる。

これほどの祝福は、他の人々にはなかなかして得られないのである。

主の祝福があって、予言者の勧告に従ってその準備をすることができるように。宣教師となって世界中に出て行き、イエス・キリストの福音を教えることである。あなた方には、この地上で特別な召しが、また特別な能力が与えられている。人々の生活の中に、いまだかつて経験したこともないほどの大きな幸福をもたらすことである。あなた方は皆、特別な重要な、また必要とされている存在なのである。

(フィリピン及び韓国における地域総大会青少年の集いのピーターソン監督の説教を収録したもの。)

「今年中にこの母親を教会に導いて下さいますね。」監督からこの話が持ち出され私がそれを引き受けたのは、年が明けて間もなくだった。そして、この言葉により、私は伝道することの大きな喜びを知ることができたのである。

その母親は教会員の娘と一緒に暮らしていたがまだ非教会員で、私はその家族のホームティーチャーであった。それからの数日間、同僚と私は大切な初めての訪問のために準備した。

## 決心さえすれば

マーク・ハート



した。しかし具体的な方法は決まらなかった。バプテスマのことをどう切り出せばよいのだろうか。これという考えもないまま私たちは訪問したが、快く迎えられた。

さてそろそろ帰ろうというときになって、ふと私は思った。「この人は私を知らない。だから少々きついことを言っても大丈夫だろう。」私は深呼吸をすると「これまでずっとモルモンの中に住んでいて、教会にお入りにならないのはなぜですか？」と突っ込んでみた。

母親は黙ったままだった。私はたたみかけるように、「お母さんが教会に入る決心さえなされば、必要なことは全部喜んで私がお手伝いしますから」と言った。

1週間後、母親から電話がかかってきた。「ハート兄弟、あなたの教会の会員になるためにはどんなことをしなければなりませんの？」彼女がバプテスマを受けたのは、それから2週間後であった。（私たちはまだ2月の訪問はしていなかった。）

このようにして伝道の素晴らしさを知った私は、自分の周囲にいる人々に証を述べることにした。最初は、ひとりの高校の教師である。頭脳明晰なこの青年教師は私の遠い親戚の女性と結婚していた。しかしまたもや、どのように話を持っていったらよいかという問題に直面した。

高校で集会が開かれたある日のことだった。私は通路側の席をひとつ空けて腰を下ろした。「これからあとは主におまかせしよう。」

ほどなくして、私の横に座ったのはお目当ての教師だった。またも私は単刀直入に話しかけた。「私には不思議でしょうがないんです。4年間もブリガム・ヤング大学で過ごしながら、なぜモルモンにならなかったんですか。」それから例のごとく、「教会に入る決心さえしていただければ、私はあなたのために必要なことはなんでもします。」と言った。

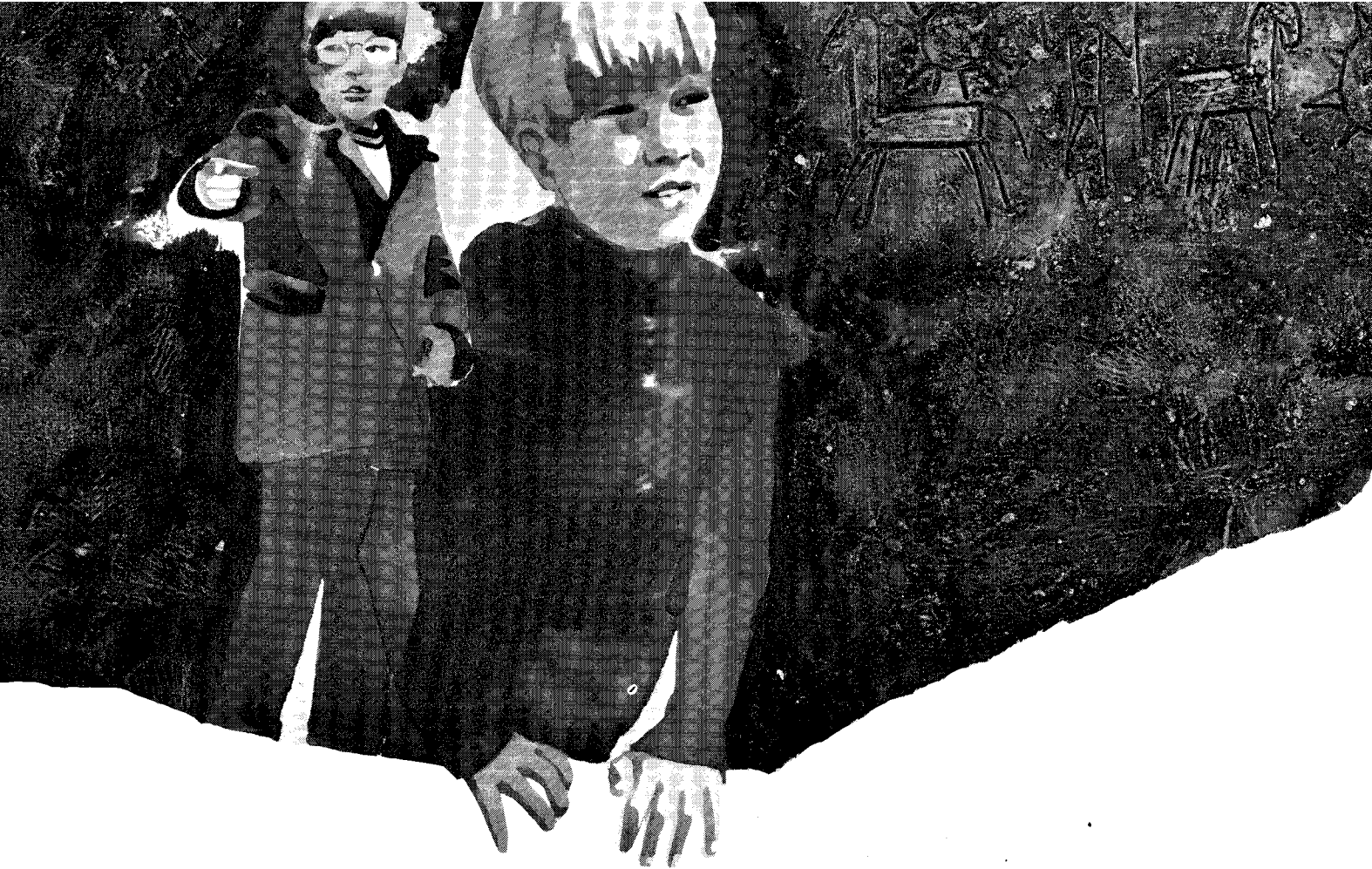
3日後、電話がかかってきた。そして、バプテスマを受けたのは3週間後であった。

次に私が思いついたのは、私の生徒のひとりで、バプテスマのことなどただの一度も気にかけたことのないような子だった。その生徒も、私が例の「僕は君のために必要なことは喜んでするよ」と言葉をかけてから数カ月後、教会員になった。

ほんのわずかの言葉で、私は主の約束にあるような大いなる喜びを得ることができたのである。

「さて、わが御父の国にわれの許に導きたる唯一人の人につきて汝らの悦び大いならば、汝らもし多くの人を導き来らばその悦びは果して如何ばかりぞや。」（教義と聖約 18: 16）

（マーク・ハート兄弟は児童向け教育資料の著述および出版に携わっており、プレストン第8ワード部の日曜学校教師をしている。また、アイダホ州プレストン南ステーク部の幹部書記であり、ローガン神殿の職員でもある。）



## モルモン経の 発見

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

「アメリカを発見した人はだれですか」と、教師が聞いた。たったひとりを除いて全員が「コロンブス」と答えた。そのひとは、「私です」と返事をした。子供たちは笑った。しかしここには、注目すべきことが提起されている。「私です」と答えた生徒は、実際に自分でアメリカについて知識を発見していたのである。

予言者ジョセフ・スミスはこのように記録している。「私は兄弟たちにこう語った。モルモン経は地上で最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石であって、人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である。」

( *History of the Church* 「教会歴史」 4・461)

私は、予言者のこの言葉が真実であることを発見した。

私は子供の頃、ガデアントン強盗団の話に夢中になった。当時住んでいたメキシコ北部の山にはほら穴が無数にあって、そこを探検するとやじりなどの昔の遺物が見つかった。壁には奇妙な絵や象形文字が描いてあって、私はそこが強盗団の隠れ家だったのではないかと考えた。そして、ほら穴にまつわるまことしやかな話が後を継いで出てくると、私はモルモン経のガデアントン強盗団のことを何度も何度も読み返したものである。

その後、カシア・アカデミーの高校1年のとき、神学のクラスでモルモン経がテキストに使われた。最近になってその時のノートにモルモン経の各章の内容についての短い感想文があるのを見つけた。

それからもっと後になって、1920年から1923年まで伝道に出た間に、私はモルモン経をもっとよく知ることになった。しかし、モルモン経について本物の知識を得、モルモン経を愛するようになったのは、1929年から1941年の弁護士を開業した時代であった。

私が法律学校を出て弁護士試験にパスし、開業資格を得たあと、イエス・キリストの福音の標準を守りながら弁護士をやっているものかどうか気がかりになってきた。父の心配もそれに拍車をかけた。

私は予言者ジョセフがモルモン経を高く評価していたの



私は子供の頃、ガデアントン強盗団の話に夢中になった。当時住んでいたメキシコ北部の山にはほら穴が無数にあつて、そこを探索するとやじりなどの昔の遺物が見つかった。壁には奇妙な絵や象形文字が描いてあつて、私はそこが強盗団の隠れ家だったのではないかと考えた。

を思い出して、次のようなことをしようと決め、実行した。

いつも同僚たちより30分早く事務所に行って、ドアに鍵をかけ、毎朝30分を祈りと聖典の勉強に費した。弁護士生活の12年間に、そうしてモルモン経を9回読破した。

私はそれ以来、何回もモルモン経を読んだ。そこから、実に大切な教訓をたくさん得た。次に少し例をあげて一緒に考えてみよう。

まず、ニーファイの示した信仰と勇気である。

父のリーハイが、「レーバンの家へ行ってその歴史をくれるように」たのむことを主が望んでおられると言ったとき、兄弟たちが不平を鳴らしたのを、皆さんは覚えておいでであろうか。ところがニーファイはこう答えた。

「私は主が命じたもうたことを行っていく。私は、主が命じたもうたことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである」。

(I ニーファイ 3: 4、7)

ニーファイと兄弟たちが「やがてエルサレムの地へ着くと」、だれがレーバンの家へ行くかくじを引くと、レーマンに当たった。そこでレーマンは出かけたが、歴史はもらえなかった。レーマンが帰ってくると、兄弟たちはニーファイひとりを除いて、真ちゅう版を持たずに手ぶらで父の所へ帰ろうと言った。そのときニーファイは言った。

「主が生きていまし私が生きてるように確に、私たちは主の命じたもうたことを果すまでは荒野にいる父のところへ帰らない」。(I ニーファイ 3: 10-11、15)

そして、自分たちの相続した土地へ行って金銀その他の貴重品を集め、それで真ちゅう版を買おうと勧めた。リーハイの息子たちはそのようにしたが、レーバンは版を手離すのを拒んだ。それどころか、兄弟たちから持物を奪い、召使いたちに命をねらわせた。

エレサレムの城壁の外に逃れると、またレーマンとレミユエルは怒ってニーファイとサームを棒で叩いた。ニーファイはそれからひとりで町へ行き、主に助けられて真ちゅう版を手に入れた。

その後いろいろな折りに、劇的に示されるニーファイのすぐれた信仰は私たちに深い感動を与える。主に命じられた通りに舟を造ろうとしたとき、兄弟たちはニーファイをあざけり、反対し、できるはずがないと言ったが、ニーファイはこのように言った。「もしも神が私にするように命じたもうならば私はあらゆることをすることができる。もし、神が私にこの水よ土になれと言え、と命じたもうならば、水は土になるから、私がもしそう言えばその通りになる」。(I ニーファイ 17: 50)

こうしてニーファイは舟を立派に造り上げ、ぶつぶつ不平を言う兄弟たちを乗せて航海に出た。

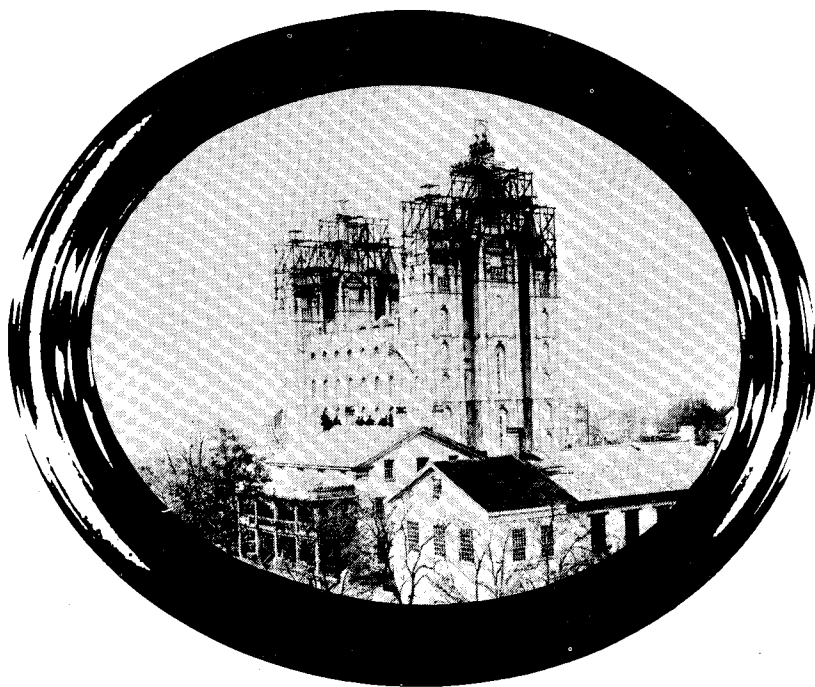
私がモルモン経から学んだもうひとつの大切な教訓は、自分の罪が許されたことをどのようにして知るかということである。モーサヤ書の第4章の1節を考えてみると、その解答が明確に浮かんできた。

聖典の中でも最もすぐれた説教のひとつが、モーサヤ書のはじめに記録されている。ベンジャミン王の人民への惜別の説教である。

第4章の最初の3節にはこう書かれている。

「さて、ベンジャミン王は主の使から伝えられた言葉を宣べ終って、民の群衆を見わたしたところ、ごらん、かれらは主をおそれる心を起して地に伏した。かれらは、自分たちが肉の欲に支配されている有様をかえりみ、自分たちは土の塵よりも劣っていると思って、声をそろえて高く叫んで言った『ああ憐みたまえ。キリストの血による身代りの贖罪の効力を及ぼして、われらが各々その罪を赦されて心を清められるようになしたまえ。われらは天地万物を造ってこの後人間に降臨したもう神の御子イエス・キリストを信じ奉る』と。それから後、かれらはベンジャミン王が聞かせたように降臨したもうはずのイエス・キリストを深く信じたので、もはやその罪の赦しを受けて良心が安らくなったから、主の『みたま』がかれらに下ってその心が喜びに満された。」(モーサヤ 4:1-3)

モルモン経を発見し、その教えに従うすべての人は、永遠の生命への道をたどっているのである。



間もなく21歳の誕生日を迎えようとするときに、私は友人たちの反対を押しきって、ユタ郡（ユタの北部）からセントジョージ（ユタの南部）まで長旅をし、セントジョージ神殿で結婚をした。私はこう決意したことをいつも感謝している。当時はまだユタ郡の南まで鉄道が敷かれていなかったで、途中で馬車に乗り換える。道はひどく何日も何日もつらい旅をしなければならなかった。（ソルトレーク・シティーからユタ郡までの鉄道距離はおよそ74キロで、ユタ郡からセントジョージまで馬車の旅では445キロほどだった。）

多くの人が、そんな苦労をしなくてもいいのではないか。わざわざセントジョージまで行って結婚しなくてもよいのと言った。ステーキ部長か監督に司式をしてもらい、ソルトレーク神殿が完成したら妻子と一緒に永遠の結び固めが受けられるのだからというのである。

どうして忠告を押しきって旅を決意したのだろうか。私はこの世と永遠にわたって結婚したかった。ふたりの人生を正しくスタートしたかったのである。はためには待った方が何もかも都合良くいくのと思われただろう。でも、

## セントジョージ 神殿での結婚

第7代大管長  
ヒーバー・J・グラント

私は後になって、あの時あの神殿で結婚する決意をしたことを本当に良かったと思った。それにはわけがある。

何年前、若い女性相互発達協会の中央管理会の姉妹たちが、シオンの各ステーキ部を訪れ、結婚というテーマで話をした。彼女たちは、若人に新しい人生を正しい結婚で、つまり主の神殿で行なう結婚によって正しくスタートするようにと勧めていた。

私があるステーキ部の大会に出席したときに、若い女性中央管理会を代表して大会に来ていた私の娘がこう話を

した。「私が正しく出生したこと、主の神殿で正しい結婚をして結び固められた両親から、誓約の下で生まれたことを、心から主に感謝しています。」

私はこみあげてくるものを抑えることができなかった。娘の母親はソルトレーク神殿の完成を待たずに死んだのである。私はセントジョージ神殿まで行って結婚しなくてもいいと勧めた友人の言葉を聞かなくてよかったと感謝した。人生を正しくスタートしなければというあの時の靈感と決意を、私は心から感謝している。

その決意はなぜ生まれたのだろうか。それは、私の母が福音を信じ、私にその価値を教えてくれたからであり、人生を正しく始め、福音の教えに従って生きることによって恵みをたくさん得たいという望みを植え付けてくれたからである。

私は、末日聖徒のふさわしい男女は、ふたりの人生を主の宮居で始めるよう努力すべきだと思う。その神聖な場所で結ばれた結婚の誓いと、この世においても永遠にわたっても続く聖なる誓約は、家庭を破壊し、幸福をくつがえそうとする、人生の幾多の誘惑を阻止する力である。



## 金のせいしょ

お話：モーリーン・ビーチャー

「あ、金のせいしょが読みたい。」メアリーは、まだモルモンけいを見たことがありませんでした。

ある日のこと、ジョン・ホイットマーが、ムーリーきょうだいの家へ、やって来ました。ジョン・ホイットマーは、金のせいしょを見た人です。きっと、モルモンけいを、もって来たにちがいありません。メアリーは、ムーリーきょうだい

の家へ走って行きました。ジョン・ホイットマーは、もういませんでしたが、そこには、モルモンけいがおいてありました。

「読んでいいですか。おじさんが、でかけている間だけでいいんです。」メアリーは、いきをはずませながら、いいました。

「おとなの人たちも、まだ読んでいないだよ。それに、もう夕方だ。」ムーリーきょうだいは、メアリーの目をじっ



と見ました。そして、いいました。「あしたの朝までに、かえしておくれ。」

メアリーは、モルモンけいを、うでにだいて、走ってかえりました。あんまりうれしくて、足が地めんにつかないくらいでした。「見てちょうだい、金のせいしょよ。」

その日は、家ぞくみんなで、声を出して読みました。日がくれても、ろうそくをつけて、夜おそくまで。空には、ほしがキラキラとかがやいていました。

つぎの朝早く、メアリーは、やくそくどおり、モルモンけいをかえしに行きました。

「ここまで読んだの。」

「ほんとうかい。」ムーリーきょうだいは、かんしんして、目を丸くしました。

「もって帰っていいよ。ぜんぶ、読んでしまいなさい。」それから何日かたって、よげんしゃジョセフ・スミスが、メアリ

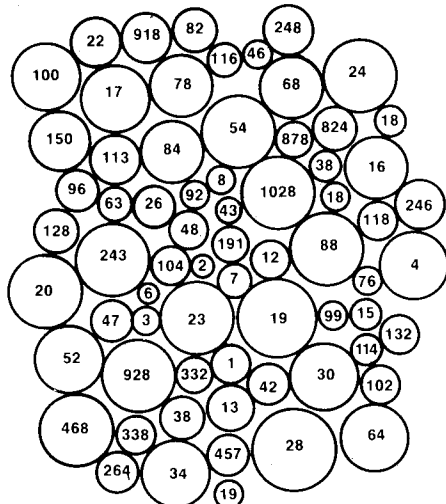
ーの家へやって来て、メアリーに会いたいといいました。メアリーは、とんで行きました。よげんしゃに会うのは、はじめてでした。

「ああ、あの人がよげんしゃだ。なんてきれいな、青い目なんだろう。きっと、わたしの心が、わかるんだろうな。」メアリーは思いました。よげんしゃは、メアリーのそばに来て、しゅくふくしてくれました。そして、モルモンけいを、1さつくれました。「ありがとう、ジョセフきょうだい。わたしのモルモンけいだわ。わたしのだわ。」うれしくて、うれしくて、むねがいっぱいになりました。

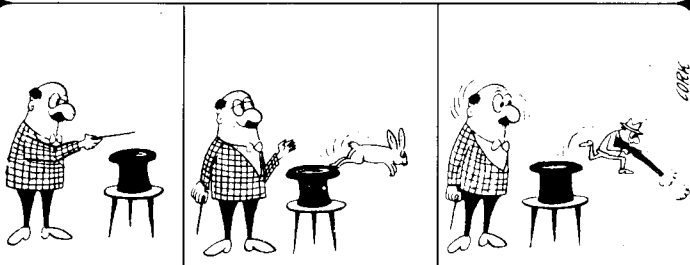
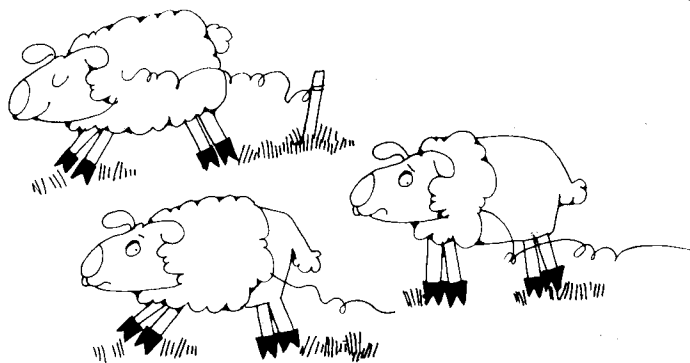
それからというもの、メアリーは、なんどもなんども、モルモンけいを読みました。そして、読むたびに、よげんしゃジョセフ・スミスのことを、思い出しました。それから……そうです、はじめて読んだ、あのときのことを。

## ぬけている数字

リチャード・ラタ



ぬけている数字をみつけて下さい。奇数を補ってみましょう。



## せいざ

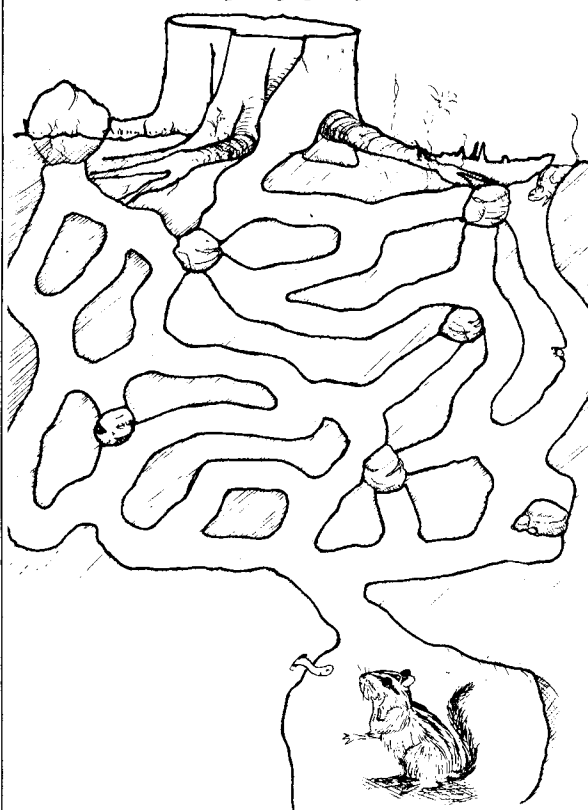
ロバータ・フェアラル



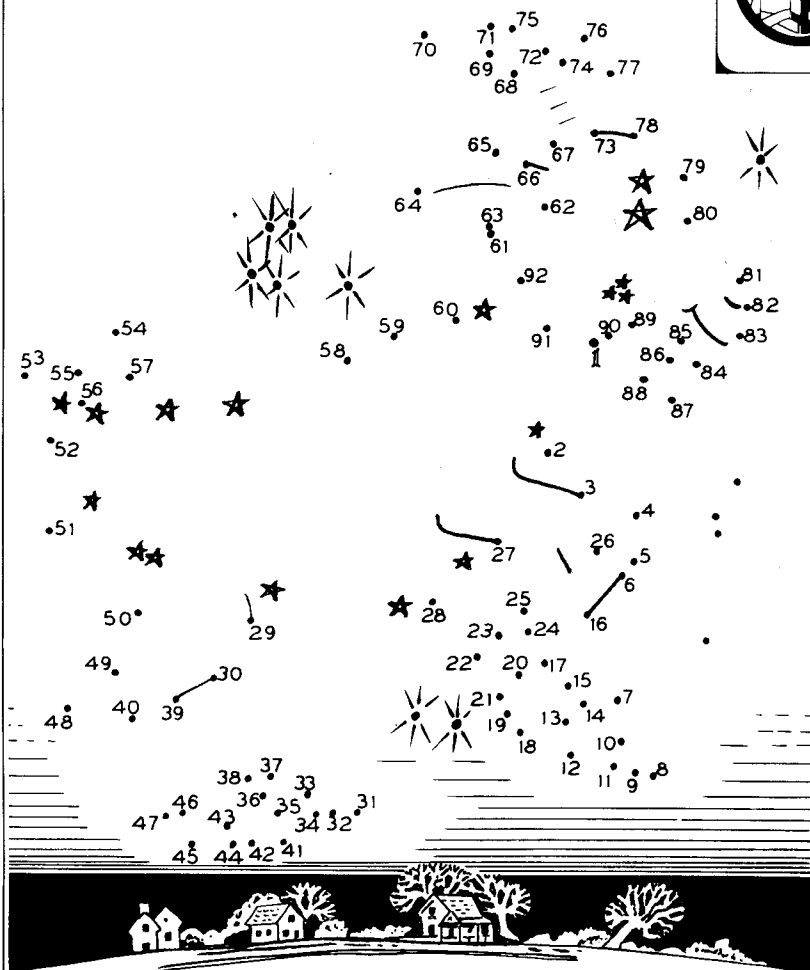
## おもちゃばこ

### リスくんのおうち

ローラ・フランク

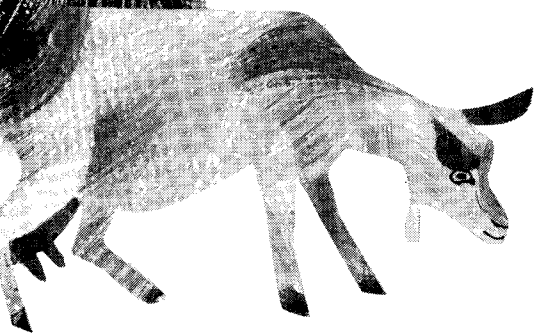


リスくんが、そとへでられなくなっちゃった。どのみちをいけば、でられるのかな



おそらには、ほしがキラキラひかっています。てんをむすんでみましょう。なにができるかな。





ジュバは、びっこだった。こんど、おにいちゃんが、ま  
ちのがっこうへいく。だから、ジュバがひとりで、ウ  
ィンクラーさんの、ヤギのばんをしなければならない。

「ぼく、ちゃんと、ヤギをおっていけるよ。」おとうさ  
んと、おにいちゃんは、かおを、みあわせた。「できるっ  
てば。」

「ウィンクラーさんに、いっておいで。やりますって。」  
おとうさんは、とうとうそういった。

つぎの日から、ジュバはひとりで、ヤギを山のとっぺん  
まで、おっていった。とっぺんには、一ばんいいくさが、  
はえているからだ。びっこのあしが、いたくなって、とき  
どき、やめようかな、とおもった。でも、なつのあいだじ  
ゅう、ジュバはがんばった。





# がんばれ！ 山のとっぺんまで

おはなし：ヘーゼル・エム・トムソン



ふゆがきた。山には、ゆきがふった。もう、ヤギをおわなくてもいい。ある日、ウィンクラーさんが、ジュバのうちに、やってきた。そして、こういった。「ありがとうよ、ジュバ。おまえのおかげで、うちのヤギは、まるまるふとった。とっぺんのくさが、よかったんじゃよ。おれいに、おまえをまちのおいしゃさんに、つれていって、びっこをなおしてやりたいんじゃが。」

「ほんとう？」きつと、みんなとおんなじくらい、はやくはしれるようになる。ゆめみたいだった。

おとうさんが、そつといった。「うれしいよ、ジュバ。」

「ぼくのあしが、なおるから？」

「いいや、なつのあいだ、ずっとがんばってくれたからじゃよ。よくやった。やはり、わしのむすこじゃ。」

**エ**ッサイは、むすこのダビデにいいました。「にいさんたちに、たべものをとどけておくれ、そして、ようすを見て来ておくれ。」ダビデのにいさんたちは、せんそうに行っていたのです。

さて、せんじょうでは、大へんなことが、おこっていました。てきのゴリアテという大男が、朝夕出て来ては、だれか一きうちをするものはいないか、とよばわっていたのです。ゴリアテはいいました。「おまえたちがかてば、われわれは、おまえたちの家来になる。そのかわり、われわれがかてば、おまえたちは、われわれの家来になれ。」イスラエルの人々の中には、ゴリアテとたたかう、ゆうきのある人は、いませんでした。

ダビデはそれを見て、サウル王にいいました。「イスラエルは、神さまのぐんぜいではありませんか。ぼくが行って、たたかきましょう。」

「おまえでは、かてない。あの大男は、とてもつよいのだ。」

「クマやライオンが、ぼくのひつじをおそったときも、ぼくは、ひとつをすくい出しました。神さまが、ついていらっしゃるから、だいじょうぶです。」

「よろしい。行きなさい。」

サウル王は、よろいとかぶとを、かしてくれました。でも、ダビデはそれをぬぎ、石と石なげきをもって、ゴリアテにちかづいて行きました。心の中で、神さまに、たすけてくださいと、おいのりしました。

ゴリアテは、まだ少年のダビデを見て、ばかにしました。「ふふん、おまえのにくを、鳥やけものの、えさにしてやる。」

「ぼくのほうこそ、おまえのにくを、

## 神さまが



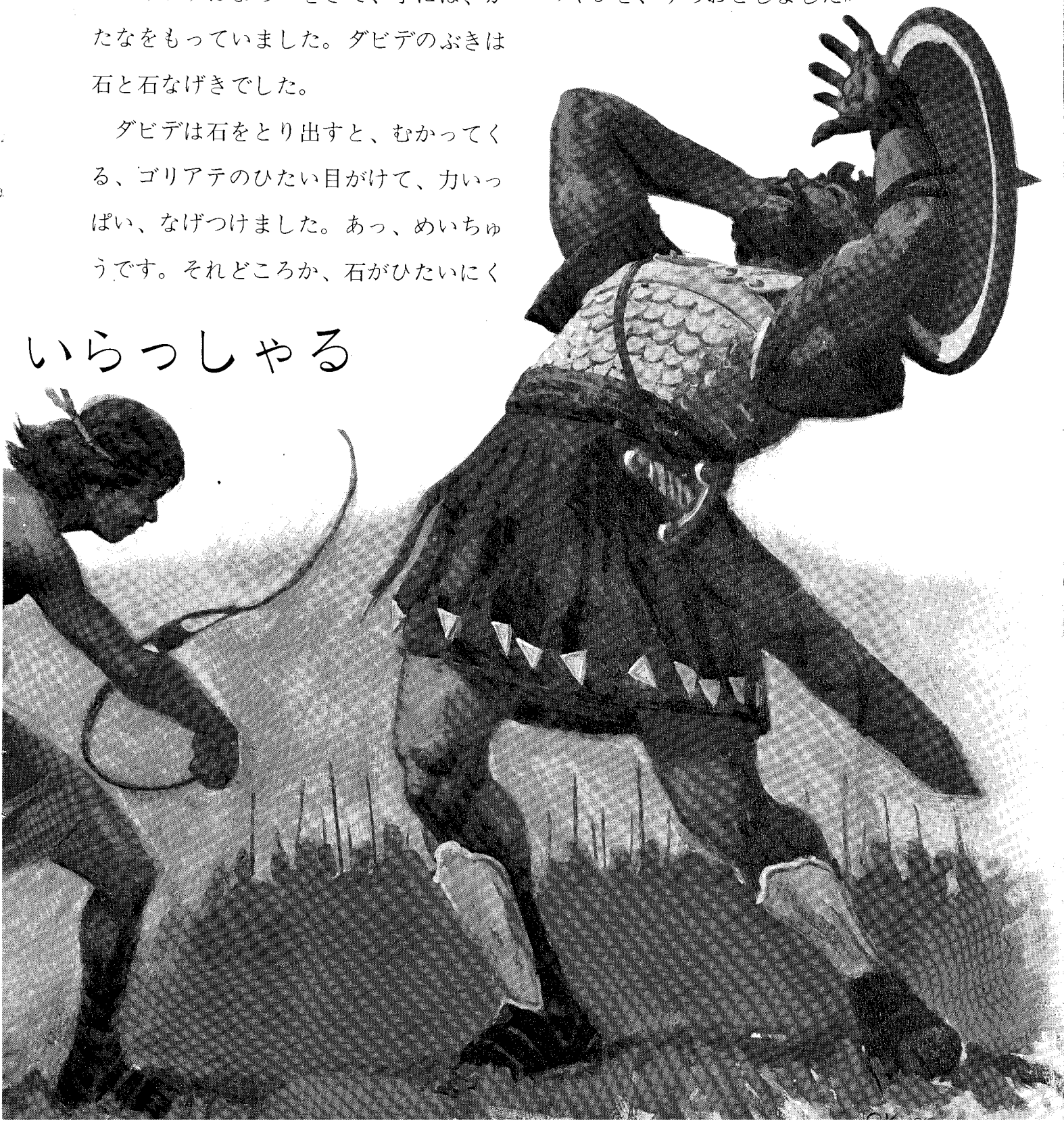
鳥やげものの、えさにしてやるぞ。イスラエルに、神さまがいらっしゃることをおしえてやるぞ。」

ゴリアテはよろいをきて、手には、かたなをもっていました。ダビデのぶきは石と石なげきでした。

ダビデは石をとり出すと、むかってくる、ゴリアテのひたい目がけて、力いっぱい、なげつけました。あっ、めいちゃうです。それどころか、石がひたいにく

いこんで、ゴリアテは、どうと音を立てて、地めんにたおれました。ダビデは走りより、ゴリアテのかたなをとって、そのくびを、うちおとしました。

いらっしゃる





# なにがかくれているのかな

カエル、カメ、チョウチョ、ナメクジ、アリ、  
ぜんぶみつけたら、ぬりえをしましょう。





# 律法 ありて

ハリー・J・ホルドマン



RHULL

カタリナ島で開かれたヤングアダルトの地域大会で、サンタバーバラ地区の代表たちは、大会の一活動として、市庁の法廷に集まるよう指示された。この活動の最後に、その地区のヤングアダルトプログラムの神権リーダーを務めるハリー・J・ホルドマンという兄弟が、判事席に立ち、静まりかえっ

た法廷で熱心に耳を傾ける若人たちに向かい、次のような話をした。これは、彼が語ったままの物語である。

◇ ◇

私はハリー・J・ホルドマンといいます。現在は、カリフォルニア州サンタバーバラスターキ部のサンタバーバワード部に所属しています。これから私がお話することは、すべて実話です。私はそれを、自分の生涯に起こったままにお話ししたいと思います。

1950年代の初め頃、私はカリフォルニア州ロサンゼルス東スターキ部のローズミードワード部の監督をしていました。そのワード部は、会員数 500 人程度の言わば平均的なワード部でした。またその地区には専任宣教師もいて、町のあちこちでちらし配りをしておりました。ある日、宣教師たちがひとりの男の人の家へ訪問しました。家へ入るように言いますので、宣教師たちは中に入って教会のことについて簡単に紹介しました。すると、なぜか本人も理由もわからないまま、この男の人——一応この男の人の名前をボブとでもしておきましょうか——このボブは、宣教師にまた来てくれるよう頼んだのでした。

ボブは、その後福音についてのレッスンを受け続けました。奥さんも、小さな息子さんも一緒でした。そしてとうとうレッスンが全部終わったとき、ボブは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になる決心をしました。でも奥さんはあまり関心を示しませんでした。それと言うのも、ボブは、全くもってひどいアルコール中毒患者でそのため何度かつらい目にあった奥さんは、ボブのことをもう信じられなくなっていたからです。しかしこのとき、ボブは1週間お酒を飲まずに過ごしました。また、会社の仕事も立派に果たしました。ボブはそれまで何年も酒を欠かしたことがなく、それもその度が過ぎたために、奥さんの愛情をことごとくなくしてしまっていたのでした。奥さんは彼のすることに何も関心を示しませんでした。また、彼がよもや教会に入ろうとは夢にも思っていないのでした。万一入ったとしても、アルコールの魔力から逃れることは絶対に不可能だと思っていたのです。ですから奥さんはボブにこう言いました。「あなたがあの人たちの教会に入りたいんなら、勝

手にしたらいいでしょ。でも、私は興味ありませんからね。私がこうやってあなたと一緒に暮らしているのは、ただ私と息子の生活のためなんですから。ただそれだけのためなんですよ。」

そう言うわけでボブは、周囲の協力は得られませんでした。無事バプテスマを受けました。ボブは、バプテスマの前の面接とレッスンで約束をしたとおり、その日以来、アルコールやタバコとぶつとりと縁を切りました。これには奥さんが驚いてしまいました。言うまでもありませんが、奥さんも、ボブの改宗の実と、その生活の急変ぶりに目を向け始めました。段々と態度も和らいできました。教会も身近なものとして考えるようになり、遂に奥さんも息子さんと一緒にバプテスマを受けました。

その後数年間、ボブは教会で目覚しい成長を遂げました。私は彼をワード部のボーイスカウトの隊長に召しました。彼はこの召しを受け、見事に務めを果たし、立派な業績をあげました。

ところで、彼は酒とのつき合いが長かったため、すでに何度も酒酔い運転や、それに類する犯罪で逮捕された経験を持っていました。またそのために運転免許も取り消されていましたので、車を運転することができませんでした。ボブはこの規則を厳密に守り、家族の運転は奥さんが引き受けていました。ボブは教会堂の近くに住んでいましたので、教会へは歩いて通うことができました。ところが、ボブはこれまで勤めていた製造部門の原料供給係という仕事をやめることになりました。新しい職場が見つかったのです。今度の仕事は、以前よりはるかに働きがいのある仕事でした。ところが、前の職場では通勤するのに車に相乗りさせてもらっていたのですが、新しい職場に移って初めて報告書を提出する予定のその日の朝、どう捜しても相乗りする算段がつきませんでした。それで、大きな恐れと憂いを感じながらも、ボブは自分で運転せざるを得まい、という結論に達しました。

職場へ向かう途中、ボブは慎重に、規則通りに運転していました。ところが何か小さな違反で——恐らく車線変更の違反か、そのたぐいだと思うのですが、とにかく警官から停止命令を受けたのです。もちろん、彼が無免許運

転だということはすぐにわかりました。ボブは今回の違反で自分がどう処分されるのかよく知っていました。

その晩、私が仕事を終えて家へ帰って来ると、ボブから電話がありました。「監督さん、こんなことを言うのはとても残念なんです。スカウトの隊長の仕事をやめさせて下さい。それからワードティーチングの責任からもおろしていただきたいんです。しばらく教会に出席できそうもありませんから。責任を全然与えないでいただきたいんです。ひとりにさせて欲しいんです。私が申し上げることはこれだけです。お願いします。」

言うまでもないことですが、ボブの口からそのような言葉を聞くなで、私には全く大きな衝撃でした。自分の耳さえ疑ったほどです。それでも、ボブが真剣だったことはわかりました。私は何とかして、彼の口から、一体何が起こったのか、聞き出そうとしました。ボブはなかなかうんと言ってくれません。事件の内容はおろか、事件のことを口に出すことさえいやがります。でもしばらくしてから、交通違反で逮捕されたことだけは話してくれました。ボブは、長年飲酒運転の前科を重ねていたために、今度裁判にかけられたときには、必ず刑務所送りになることを知っていたのです。ボブは私にこう言いました。「監督さん、あなただって刑務所送りになった隊長なんか欲しくないでしょう。教会だって、こんな悪人と関係を持ちたくはないでしょうね。それで私は自分で、教会や召しから身を引くことにしたんです。私をひとりにしておいて下さい。私に構わないで下さい。自分のことは自分で何とかしますから。」

ボブは私に、交通違反を犯した場所でも、出廷日も教えようとはしませんでした。奥さんも事情をよく知りませんでした。しかし私は、ちょっと探偵ばりの活動をして、彼の出廷場所や違反の大きさや尋問予定日などについて調べ上げました。そこで私は、仕事の予定を何とかやりくりして、その日に裁判所へ行けるようにしました。ボブは私が行くことを知りませんでした。彼の奥さんが知っていたかどうかは、よく覚えていません。それはともかく、ボブが出廷する予定の日、奥さんと私

もやはり裁判所へ出かけて行きました。法廷はどこにでもあるような法廷でした。入口は後ろ側にあり、4列ほど、劇場タイプの椅子が並んでいて、そこに傍聴人や証人が座れるようになっていました。4列並んだ椅子のすぐ前には仕切がありました。その向こう側は、かなり広いスペースがあり、大きなテーブルが数個置いてあって、そこは、弁護人と被告の席になっていました。そのさらに向こう側に、裁判官席がありました。そして裁判官の右側には法廷書記官が陣取り、左側には、尋問席があり、その奥に陪審員席がありました。

中に入った私たちは、前から2列目の右側に席を取りました。裁判官の席は私たちから見て左側にありました。15メートルから20メートルほどの距離があったのでしょうか。

まず最初の被告が呼ばれ、それから次々に呼ばれて行きました。皆、様々な弁護をしました。裁判官も、有罪か無罪か、また有罪の場合、刑期や罰金

はどうかなど、次々に判決を下して行きました。そして、とうとう私の友人ボブの名前が呼ばれました。例の如く、

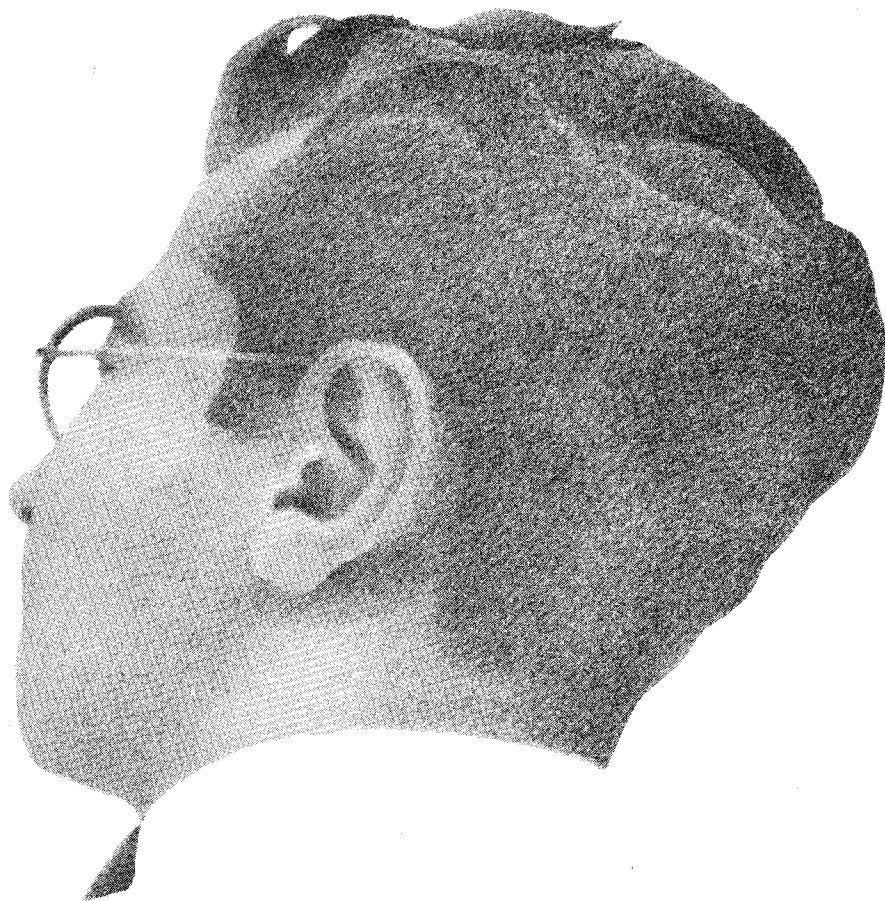
裁判長には、大冊の調書が手渡されました。その中には、このボブについて、カリフォルニア州全域の行政府が調べ上げた記録が書かれていました。

ボブは裁判官の前に立ちました。裁判官は何分間かけて、自分の前にある書類に目を通していました。読み終えると顔を上げて、ボブの方を見ました。「運転免許がないのに車を運転するなんて、悪いことだと思っていないのかね」と尋ねました。ボブは「悪いことだと思っております」と答えました。裁判官は明らかにいらだっていました。いやむしろ怒ってさえいるようでした。目の前の記録を読み、この男があんな状態で運転するなんて、その上、これだけの数の違反をしておきながら、今まで一度も投獄されたことがないなんて、という思いだったようです。それで、懲らしめのつもりか、二言三言皮肉を言ったあと、つちを鳴ら

して、判決を言い渡しました。「懲役1年。」

裁判官はボブに、陪審員席の方へ入るように言いました。その日、陪審員はひとりもいませんでした。そこへ行って、ボブは備え付けの小さなかごに自分のポケットの中味を全部出すわけです。そしてそこで、保安官がバスで刑務所に連れて行ってくれるまで、しばらく座って待つことになっていました。

私は、彼のために証言をするつもりで来たはずでした。私は自分でもよく準備し、熱心に主に祈ったはずでした。主の僕として、またこのボブの監督として、私が法廷で陳述する機会があるように、そして、彼の処分を多少とも軽減できるように、祈ったはずでした。彼の奥さんはとても小さい人でした。恐らく150センチなかったと思います。座ればだれからも見えなくなるほどでした。私は一点を見つめたままでした。あつと言う間の判決言い渡し、身柄の拘束。私は強い衝撃を受けて、



感覚がまひしたようでした。ボブは、裁判官席の前の自分の席から立ち上がり、指示されたとおりの席へ行って座りました。私はそれを見て身も凍る思いでした。言葉も出ず、自責の念にかられていました。座ったまま一点を凝視していました。ボブを救えなかった。という気持でした。今考えてみますに、私がその場に長い間座っていて、あらゆることをいろいろと考えていたら、恐らく主がなぜ私を助けて下さらなかったのか、いぶかしく思ったことでしょう。私は自分のできる範囲のことは全部し終えて、大きな期待を抱いてこの法廷にやって来たはずでした。予定を調整し、熱心に祈り、彼のために何か一言言う機会を求めたはずでした。でも何もかも終わりました。ボブは懲役刑になったのです。

法廷書記官が裁判官に次の調書を渡しました。次に呼び出しを受ける人の調書です。ところが、次の被告を呼ぶまでに、若干の時間の空白ができました。裁判官は調書を熟読している様子でした。私は何も言いませんでした。手も上げませんでしたし、頭や体の一部でも動かした覚えもありませんでした。特別な表情をしたわけでもありません。突然、全く突然、少なくとも外面的な理由はないまま、裁判官は頭を上げると、法廷の端にいる私の方に、じっと視線を向けました。そして大きな声で私に言いました。「今の判決に対して何か言いたいことがあるのではありませんか。」

法廷は一瞬沈黙しました。非常に動揺したままで、私はようやく「はい」と答えました。私が、別に何か意志表示をしたわけでもないのに、裁判官はこう言ってくれたのです。驚き以外の何物でもありませんでした。自分に与えられた機会にこれほど慌てふためいたことはなかったと思います。平静を取り戻して立ち上がるまで数秒かかったように記憶しています。私はゆっくり立ち上がると、いささか弱い、震える声で話し始めました。「はい、ございます。私は、裁判長がたった今判決を言い渡した、その人を弁護するためにこの法廷にやって参りました。」この言葉に、裁判長はボブの方に目をやりました。私がボブの名前をあげると、書記官は、ゆっくりと、ボブについて

の調書を、裁判長の目に着くよう、机の上に戻しました。

「ではお話し下さい」と裁判官が言いました。

私は何度かつばを飲み込みました。ボブが私の方を見ているのに気づきました。このときまで彼は頭をたれたまま座っていたのです。私はまた話し始めました。「裁判長、私は末日聖徒イエス・キリスト教会の監督です。裁判長がたった今懲役刑を言い渡した者は、私の教会の会員です。私はその教会の、彼の住む区域を管理しています。この者は、私たちの区域で、ボースカウトの隊長をしています。そして私は、彼の弁護のために出廷したわけです。彼について知っていることをお話ししたいと思い、ここにやって来ました。確かに彼はこれまで長い間、酒にふけり、何度も法律を破ってきました。しかし1年半前、この人は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になる決心をしました。そしてそのとき以来、彼は忠実な会員として務めを果たしています。彼はバプテスマを受けて以来、1滴のアルコールも飲んでいませんし、たばこも1本もすっていませんし、1杯のコーヒーも飲んでいません。バプテスマを受けたからには決してこれらのものを取り入れないと約束したからです。彼はその後、隊長の召しを引き受けました。現在、立派な隊長として働いています。彼の隊に所属している少年たちは、彼が大好きです。私たちは彼を必要としています。彼は現在のような立派な生活をこれからも続けると約束してくれました。裁判長が判決を下す前に、この話をお聞き下さっていれば、と思っております。」

ここで一息入りしました。確か、実際には、ほんの数秒だったと思います。でも私には本当に長い時間のように思えました。裁判官は、陪審員席に座っているボブの方へ向き直ると、彼に尋ねました。「この人が言ったことは本当かね。」ボブは視線を裁判官に向けると「はい、その通りです。全部本当です」と答えました。すると裁判官は「今後この人との約束を絶対に破らないかね」と尋ねました。これに対し、ボブは「はい、裁判長。この人との約束を絶対に破りません」と言いました。

再び沈黙がしばらく続きました。そ

して裁判長がおもむろに口を開きました。「私がこれまで知り合った中で最も素晴らしい人物のひとりに、J・ルーベン・クラーク・ジュニアという人がいます。彼は、私の学生時代の級友でした。彼は偉大な人物でした。私はいつでも彼から感銘を受けていました。確か彼は現在あなたたちの教会の管理役員のひとりだと思いますが。私が彼に対して抱いている感情、モルモン教会の持つ偉大な影響力、そして被告に及ぼしている明らかな影響、また彼の約束、これらを皆考慮した上、被告の刑の執行を猶予します。」こう言い終わると再びつちを鳴らして宣言しました。「執行猶予。被告は退廷して下さい。」

これを聞いて、ボブは立ち上がりました。廷吏が、ボブの持ち物の入っているかごを彼に渡しました。彼の奥さんと私は、皆一緒に扉から出るつもりで、ボブの方へ歩み寄って行きました。私たち3人は、手に手を取って法廷から出て行きました。ほおには涙がとめどなく流れていました。

この経験は、真理に関する経験の中でも、まぎれもなく、最も美しい経験のひとつでした。人が自力でできる限り遠くまで歩き、できる限りのことをし、可能な限り精一杯責任を果たし、その最中に常に祈り、そして必要なときに主に全幅の信頼をおく。こうすれば、私たちの天父は必ず歩み寄って、戦いの手助けをして下さるのです。

J・ルーベール・クラーク・ジュニア副管長の偉大な名前、個人的な影響力、そして名声。バプテスマの水において交わした約束を果たしていた忠実な会員。そして、全くふさわしくない身でありながら、できる限りのことをした監督。これが皆一緒になって、ひとりの男の人生の歴史を変えたのでした。

これは実話です。だれかのためになればと思っています。私の証を述べたいと思います。イエス・キリストの福音は真実です。私たちの天父は非常に近くにおられます。私は生涯を通じ、この確信によって絶えず祝福を受けております。主がこれまで私に、幾度も幾度も、祝福をお与え下さったからです。この記録と証が、何かの役に立てばと心から願っております。





## 改宗の 過程とは

七十人最高評議員会会員  
ハートマン・レクター・ジュニア

聖徒の証は教会の力である。と言うよりも、改宗した人々は教会の力であると言った方が適切であろうか。スペンサー・W・キンボール大管長もそのことを考えた上で、改宗者は教会の活力の源であると言ったのではないだろうか。「もしひとりの改宗者もいなければ、教会は衰退しやがて消え失せてしまうことは確かである」と大管長は語っている。（「聖徒の道」 1974年11月号 p. 481）

これは正に、改宗が必要なことを率直に言い表わした言葉である。この神権時代に主から教会に与えられた最初の責任は伝道活動であった。また同時にこれは、時の絶頂の時代における主の最後の戒めでもある。主は別れ際にこう戒められた。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」（マルコ16:15）

今日の教会で、直接的にせよ間接的にせよ、伝道活動の恩恵を受けずに教会員になっている者はひとりとしていない。この神権時代に宣教師によらないで福音を受け入れたのはただひとり、予言者ジョセフ・スミスのみである。だがこう言うとモロナイがあまり喜ばないであろう。モロナイは自分のことを良い宣教師であると考えていたのではないかと思う。事実、彼は立派な宣教師であった。だが、その他の人々は皆、回復の教えを、直接的にせよ間接的にせよ、宣教師を通じて聞いている。宣教師は、教えを聞く人々を捜し出し、教会の標準聖典に書かれているがままに、平明にやさしく福音を教えるよう求められている。さらに宣教師は、「今日新たに啓示されたみ業と教義が真理であることを証するのである。」（ジョセフ・フィールディング・スミス、*Ensign* 「エンサイン」 1972年7月号 p. 28）

改宗の方法はみたまにより教えることである。証が生まれ、心の改宗が起こるに先立ち、人は、神と人との関係についての真理を学ばなければならない。人は真理を信じるだけでなく、真理と調和した行ないをしなければならない。信じることと行なうことがひとつになることこそ、信仰なのである。そしてこの信仰がなければ神に喜んでいただくことはできない。「なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。」（ヘブル11:6）

これには、まずだれか福音を説く人が必要である。「信仰は（神のみ言葉を）聞くことによる」からである。（ローマ10:17）人は信じる前に、何か情報を提供してもらわなければならない。そのあとで、その情報を信じるか、疑うかの決定をするのである。その情報が真実であるならば、また真実であって欲しいと望み、またそう信じ、その後、与えられた情報に従順に振舞うならば、その人は信仰を働かせているのであり、そういう人はやがてその情報が真実であることを知り、改宗するのである。一方、たとえそれが真実であっても疑うような人は、決して真理を見出すことはないし、証を得ることもない。また、改宗することも決してない。少なくとも、疑うことを止めるまではそのような状態が続くのである。

信仰とは完全な知識を持つことではない。もし人がその情報に関する完全な知識を持っていたら、信仰を持つ必要がないことは自明の理である。ある物事を知っていたら、それを信じる必要は毛頭ない。（アルマ32:18参照）

信仰を持っている人は、ある事柄が真実であることをたとえ知らなくても知っているかの如く行動する。そのような力が、求道者に与えられるのである。行ないがあって初めて知識が生まれる。証とは福音の原則を知ることであり、行ないすなわち証に従った生活が改宗の証拠なのである。

福音の全般にわたって証を得て改宗するのではなく、福音のあるひとつの原則にのみ証を得て改宗することはあり得る。これは正しい。はじめにペテロを例にとってみよう。キリストが裏切られた晩の彼の行動を見る限り、ペテロは、イエスがキリストであるという証は持っていたが、真理を伝えるという面では証を持っていなかった。什分の一の律法に改宗して、什分の一を納めながら、断食献金を納めることを拒む人もいる。すでに亡くなった予言者たちに従うという点で改宗しながら、生ける予言者に従うという点で改宗していない人もいる。生ける予言者に従うという点で改宗しながら、自分たちの監督に従うという点で改宗していない人もいる。監督は、その予言者の召しに答えて働いているのに、そういう人もいるのである。そのような人々は恐らく、たとえイエスから求められたとしても、ユダを十二使徒のひとりとして認めることは決してないであろう。

改宗の本当の印は、主の油注がれた僕が与える勧告に対して喜んで断食し祈り、その勧告が確かなものであることを自らの手で知ろうとするかどうかにある。たとえその僕



と意見を異にしている、真に改宗した人々は喜んでそうする。真の改宗とは福音の第5の原則、すなわち耐えて忍ぶことである。事実、モルモン経の記録から、それが天父のみこころであることがわかる。ニーファイは次のように記録している。「天の御父は『悔い改めよ、悔い改めよ。わが愛子の名によりてバプテスマを受けよ』と命じたもうた。」(Ⅱニーファイ31:11) その後の記録にはこうある。「私はまた天の御父が『わが愛子の言うことは真実にして確なり。終りまで忍ぶ者は救われん』と仰せになる声を聞いた。」(Ⅱニーファイ31:15)

さらにニーファイは、極めて意味深い言葉を述べている。「さて私の愛する兄弟たちよ、私はこれによって、人がもしも生ける神の御子が示したもうた模範に従って終りまで忍ばないならば決して救われないことを知っている。」

(Ⅱニーファイ31:16) イエスの示された模範のうち最も極立っているのは、従順という模範である。「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。」(ヨハネ7:16) 「子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。」

(ヨハネ5:19) また御子は、御自分の意志を果たすために来られたのではなく、「つかわされたかた」のみこころを行なうために来られたのである。(ヨハネ4:34参照)

ニーファイはさらに次のように続けている。

「それであるから、あなたたちの主であり救い主である御方の為したもうことを先見して私がこれまでに話したことをあなたたちも行え。このことが私に示されたのは、私があなたたちの入らねばならぬ門を知らせるためである。その門とはすなわち悔い改めて水のバプテスマを受け、それから火と聖霊によって罪の赦しを受けることを言う。

そうすれば、あなたたちはすでに永遠の生命へ行く真直ぐで狭い道に入ったのである。すでにその門から入って天の御父とその御子との命令に従う行いをし、天の御父とその御子のことを証する聖霊を受けたのである。そして聖霊が降るのは、汝らがもしも道によって入るならば聖霊を受けると言う神の約束が履行されることである。

さて私の愛する兄弟たちよ、私は尋ねたい。あなたたちはこの真直ぐで狭い道に入ったら、それで万事終りであるか。ごらんそうではない。あなたたちがもしもキリストの言葉によってキリストを確く信仰し、人を救う大きな能力のあるキリストの功德に全く頼らなかつたら、あなたたちはここまで進んでくことさえできなかったのである。

それであるから、あなたたちはこれからもキリストを確く信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人々を愛して強く進まなければならない。それであるから、この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み、終りまで堪え忍ぶならば『永遠の命を受ける』、かくの如く天の御父が言いたもうた。

さてごらん私の兄弟たちよ。これがすなわち道である。このほかには、人を神の王国に救う道も名も天下にない。これはまことに、キリストの教えであって……天の御父

と御子と聖霊の唯一つの真正な教えである。」(Ⅱニーファイ31:17-21)

ニーファイの言葉に従うなら、改宗というものは明らかに、常に継続していくものである。確かに、今その道にさしかかっている人は、すでにそこを通り抜けた人の助けを必要としている。つまり、門に入ったばかりの新会員たちは、すでにそこを通り抜け、戒めに従った生活から偉大な体験を得ている人々の助けを必要としているのである。

以上のことから、改宗の大きな証拠として、もうひとつのことをあげられよう。つまり、キリストとその模範によって改宗した人は、兄弟や家族や隣人や、門の内外にいる他国の人を憎まないということである。真の改宗者は、その敵までも愛さなければならない。

言葉を換えて言えば、私たちが主の信頼を得るためには、私たちが愛してくれる人々を愛するだけではなく、私たちにに対し愛情どころか悪意を示す人さえも愛さなければならないということである。本当に改宗の証拠となるのは、この種の行為である。このような行為は、消極的な態度や口先だけの言葉からは決して生まれて来ない。ただ無関心でいて、他人が肉体的、知的、霊的に重荷を負って戦っているのを黙って眺めているだけで何もせずに、ただ大声で励ましている。これでは何の意味もない。

ヤコブの次の言葉は意味深長である。

「ある兄弟または姉妹が裸でいて、その日の食物にもこと欠いている場合、

あなたがたのうち、だれかが、『安らかに行きなさい。暖まって、食べ飽きなさい』と言うだけで、そのからだに必要なものを何ひとつ与えなかったとしたら、なんの役に立つか。」(ヤコブ2:15,16)

喜びが人の心に生ずるのは、不確実と不信心の暗闇から、すなわち自分が何者か、どこから来たのか、ここにいる理由は何か、どこへ行こうとしているのかといったことを知らずにいる状態から、キリストの奇しき光の中に引き上げられたときである。そのとき人は、自分が見出したものを他人とも分かち合わざるを得ないような気持になる。イエスとその愛が自分の生活にどんな変化をもたらしたか、その驚くべき変化について人々に話すに違いない。アルマの言葉によれば、そのような人々は「神の子に」なり、「大きな改心」を経験し、神のみ姿を自分の身に受けて、キリストにあって新しく造られたものとなった人々なのである。(アルマ5:14)

この時点から、改宗者とイエス・キリストとの間に、新しい、また極めて私的な関係が芽生える。イエスを友とし、これまでの自分自身に対する恩恵に大いなる感謝の念を抱くのである。またやがて、自分の行ないだけでなく心の思いもすべて主の目に明らかになってくるであろう。隠せるものは何もない。それ故、公私両面にわたって、正直、公正、忠実といった徳が、自分の行動の正しさを保証するものとなる。真の改宗者は、神の最高傑作となる。正直な人がそれである。

これに対して、キリストに従い教会員になると公言しながら、いつくしみを示さない人、また神や人やその他造られたものと正しく交わろうとしない人は、神の前では全く聖い態度を示しながら人の前ではあたりをうかがい、まだ改宗が必要である。(ミカ6:8参照) 教会員の両親から生まれた人であろうと、半年前に教会に入った人であろうと、それは問題ではない。もし今言ったことが当てはまるような人がいたら、その人はまだ本当の改宗をしていないのである。言わば改宗見込み会員である。

アルマは次のように言った。

「私の兄弟諸君よ、あなたたちにもしも心を改めたことと、贖いを与える愛を讃美する歌を唱えたいと思ったことがあるならば、今もそう思えるか私はたずねたい。

あなたたちはいつも神の御前に罪を犯さずに居ったか。あなたたちがもしも今にも死ぬとするならば、心の中に『私は充分へりくだっている』と言い、また『私の衣は、その民の罪を贖うために降臨したもうキリストの血で洗われて白くなっている』と言えるであろうか。

ごらん、あなたたちは高慢な心をすっかり取り去ったか。……

あなたたちの中にはまだねたみ心をすっかり取り去らない者がいるか。……

またあなたたちの中に兄弟を悔いこれを苦しめる者があるか。

このような人は禍である。なぜならばこのような人も用意がしていない者であって悔い改めなければ救われない時がすでに近づいているからである。」(アルマ5:26-31)

真の改宗とは、これらの行為とことごとく縁を切ることである。こうしてこそ改宗が神との交わりの基盤となるのである。改宗とは、こうした成長の原則に気付き、それを受け入れることだけではない。忍耐の原則も含まれているのである。信仰を持って悔い改め、絶えず義になった行ないをすることは、福音の救いの力である。改宗とは変化を意味する。利己的でうぬぼれが強く、気短かで、不節制で、不従順で、反抗的な人間、いわゆる肉欲に従う人間から、「聖徒となり、幼児のように従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従」(モーサヤ3:19)する人間になるという変化である。

だが、こう尋ねる人もいるだろう。「まだ私の心の中に完全な改宗が起きていないと感じている場合は、どのように改め始めたらよいのでしょうか。どの点から始めたらよいのでしょうか。」まず、態度からである。

使徒パウロは、真の改宗者がとるべき正しい態度について、克明に書きつづっている。改宗の過程は、その大部分が、態度の問題である。事実人は、自分の態度ひとつで人生を変えることができる。これは、「人となりはその心にあるままであるからだ」(欽定訳箴言23:7)という言葉からもわかる通りである。パウロがダマスコへ行く途中、光を見、主のみ声を聞いた。その時彼はこう尋ねた。

「主よ、わたしは何をしたらよいのでしょうか。」(欽定訳使徒9:6) 私たちが真の意味で改宗するのは、物事を始めるにあたり、ただ主のみこころを知りさえすればよいという気持になった時である。

これまで改宗の意味について考えてきたが、ここで、改宗がどのように人の心の中で起こるかということについて少し考えてみたいと思う。私はこれまでに生涯で改宗を経験した人々——世から出でて神の王国に入った人々——と数多く話し合う機会があったが、その結果、4つの基本的な経験が浮かび上がって来た。この4つの糸がそれぞれに、あるいは束となって、改宗者の証という布地を織りあげているのである。改宗者が一様に深い感銘を受けたその4つのものは、次の通りである。

1. **モルモン経** これが改宗の鍵であると感じている人が多い。「私はモルモン経を読んで、それが真実だとわかりました」という言葉をよく耳にする。モルモン経が真実であることがわかると、イエスがあらゆる国民に自らを現わしておられる永遠の神なるキリストであることがわかる。また「聖典(聖書)の真実なること、神は人々に真に靈感を与えて古えの代と同じくまた今の代にも神の聖き業に人々を召すこと」(教義と聖約20:11)もわかる。

2. **祈り** 以前ずっと他の教会に集ってはいたが、回復された福音を紹介されるまで生涯を通じて祈ったことがなかったと述懐する改宗者も数多い。初めて主のみ前にひざまずき、へりくだって心から祈りをささげたとき、彼らは福音が真実であることを知り、そしてさらに、彼らの生活を変える力を主に求めることができたのである。

3. **宣教師** 青年男女が主のみ名によって訪ねて来てくれたことに、非常な感動を覚えている改宗者も多い。彼らの知恵と、語るときの権威に一様に驚きの色を見せている。新しい改宗者が宣教師について次のように言うのをよく耳にする。「彼らの外見が素晴らしかったわけでも、話し方が完璧だったわけでもありません。でも彼らには、彼らが語っていることは真実なんだということを確信させる何かがありました。事実、私は彼らが私に真理を話していることがわかったのです。」(No More Strangers 「もはや異国人でもなく」 1:viii)

4. **教会員** 改宗者が末日聖徒と交わり、その真の愛と関心を感じ取ることは、新しい心暖まる経緯であることが多い。改宗者は、自分が直面している様々な苦悩をすでに克服してきた会員たちから、力を得るものである。

恐らく、実際の改宗例を挙げて、これらの原則がどのように働いて改宗の奇跡をもたらしたのか見る方が、役立つかも知れない。数年前、改宗してまだ比較的に浅い頃、私はバージニア州のアーリントンに住んでいた。周りは皆、非教会員であった。そのうちに、1週間に2家族が私の家の近くに引っ越して来た。1軒は私の家のすぐ後ろであり、もう1軒は通りをはさんだ真向かいであった。当時私は合衆国の農務省に勤めていて、仕事の関係から非常に出張が多かった。月の半分くらいは家をあけるほどであった。

金曜日の晩、家へ帰ってみると、裏の家に新しい隣人が越してきて住んでいた。その隣人は私の家の垣根に上手に切れ目を入れて、門を取り付けてくれていた。これはなかなか隣人思いであると思った。その上、門の取付料も請求してはこなかった。私はまだその人と会ったこともなかった。そこで私は彼の家を訪ねて彼と知り合いになり、垣根に門を取り付けてくれたことを感謝した。私たちの会う人が皆将来教会員になる人であると考えることができたら、私たちが折に触れて受ける刺激に対して、その応答の仕方を色々調節することができるのではないかと思う。人の感情をそこなう権利などはない。感情をそこなえば、失うだけである。主は「温和にしてへりくだり」（教義と聖約38：41）という表現を用いて、人々に教会を紹介するときの方法を示しておられる。

その新しい隣人は、マッコイという名前であった。彼はノースカロライナの出身で、確かに、素晴らしい末日聖徒になりうる多くの立派な特質を具えていた。少し挙げてみよう。彼はセールスマンであった。それも腕のよいセールスマンであった。彼は物の売り方をよく心得ていた。私の経験から言うと、腕のよいセールスマンというものは、自分が物を売ることに對して、全然、あるいはほとんど抵抗感を持たないものである。何か良い商品を持っていた場合、腕のよいセールスマンならまず自分から購入するはずである。

また、この新しい隣人には、気さくに話しかけられる雰囲気があった。社交的な人物だったのである。これは常によいしるしである。率直で飾り気がないということは、根が正直であるというしるしである。この特質は、心に証が生まれるのに必ず必要なものである。その上、彼は家長であった。彼は明らかに家庭をうまく管理していた。私は、初めてこの新しい隣人を訪ねた後、妻に「彼はいい人だから、きっと教会に入るよ」と言ったことを覚えている。

私は段々とマッコイ家族に対する関心を深めていった。彼が何か福音の原則に反するようなことをしているのが目にとまると、いつもきまって私はそのことを指摘したものであった。例えば、ある日曜日の朝のこと、私が家を出て神権会に行こうとすると、その隣人が裏庭にいちごを植えているのが目に入った。私は垣根越しにこう言った。「マック、君の植えたいちごは皆枯れるよ。」彼は驚いてその理由を尋ねた。「安息日に植えているからさ。安息日に植えたいちごの苗は、絶対に育たないよ。」マックはこのような忠告を聞いて、大声で笑い出した。だが、いちごは皆枯れた。ひとつ残らず枯れたのである。

しばらくたってから、私はマックに例のいちごについて尋ねた。彼はこう言った。「それがなぜだか、みんな枯れてしまったんだ。」

そこで私はこう言った。「ぼくが言ったことを覚えているかい。みんな枯れてしまうと云っただろう。育つはずがなかったんだよ。君は安息日に植えたんだからね。」

マックはこの言葉をしばらく考えるとこう言った。「確

か君は農務省で働いているんじゃないか。」

マックはとうとう、いちごの苗がのろわれたと思うようになった。彼はそれまで安息日に何度か植え付けをして、成功していたのである。だが今回はなぜ失敗したのであろうか。私がこのことを考えるに、いちごが皆枯れると彼に告げるよう、促されたように感じたのである。私は、主が、その苗の責任をとられたと確信している。これまでの経験からわかったことは、主は好んでその僕たちの背後に立たれ、またあらゆる機会を捕えてそうさせるということである。

しばらくして、マックは私に、彼の教会の長老をふたり家から追い出したと、話してくれた。理由はこうであった。「彼らは、ぼくに割り当てた寄付金を取りに来たのさ。」毎年彼の教会には一定額のお金を納める習慣があった。だが今年の彼は、これまで通りの寄付金を納める必要がないと感じたのである。そのために彼の教会の長老が彼を激励しにやって来たのだが、マックはひどく感情を害し、彼らに家から出て行ってくれるよう言ったという次第なのであった。

ここでマック・マッコイに什分の一について話をするのは、まことにふさわしくないように思われる。しかし、理由はわからないのだが、私はこのことを話した方が良いと強く感じた。「マック、君が稼ぐお金のうち、10パーセントは主のものなのさ。」

マックが口を開いた。「什分の一について話してくれないか。」そのときは知らなかったのであるが、マックがずっと後になって私に話してくれたところによれば、彼は什分の一について理解できるよう主に祈っていたのである。そして支出が収入を10パーセントも上回っているのに、この上をどのようにして什分の一を納めることができるのか考えあぐねていたのであった。

私はその機会を捕えて、マックに私の知っている限り什分の一について話をした。その中には、ヒーバー・J・グラント大管長の物語もあった。彼の日曜学校の教師が、子供日曜学校のクラスに大きなりんごを10個持って来て、もしも10個全部あげたら何人がそのうちの1個を返してくれるか尋ねてみたという、あの話である。これに対してクラスの子供たちは皆、喜んで返すと答えてくれた。そこでこの教師はこの話を什分の一を納めることにも応用して、主は私たちに何もかも下さっているのに、たったその10分の1しか返さなくてもよいと言われている、と説明したのである。グラント大管長はこうも言った。「私たちの多くがしていることは、10番目のりんごを半分に切って、その半分以上を主の前に差し出して、主にどうぞと言っているようなものである。」私はマックにこう言った。「君はどうもこのたとえ話にあてはまるようだね。君は主の前に、ほんの一口差し出しているだけだよ。」

マックはこの言葉について深く考え、やがてこう言った。「うん。理解できるよ。君の言うことは本当だと思う。」

マックが什分の一を納めることを信じると言ったとき、

私は彼に回復されたメッセージを聞く用意ができたと思った。そこで私は言った。「マック、来週の木曜日の夜、僕の家へ教会の青年がふたり来ることになっているんだ。ふたりともユタ州ソルトレーク・シティーからわざわざやって来てくれるんだ。君に教会について紹介するためにね。この6カ月間、福音についてはほんの表面的なことしか話し合っただけで、今度ふたりが君に全般にわたって話をしてくれるはずだよ。君の奥さんのベティーや子供たちと一緒に連れて来ないかい。彼らの話が終わったら、おいしいデザートを食べる予定なんだ。」私は、彼がデザートを拒否することはないと思っていた。

こうしてマックはやって来た。彼がデザートのために来たのかどうか定かではないが、とにかく彼は妻と4人の子供を連れてやって来たのである。宣教師たちは立派なレッスンをし、第1回目のレッスンは無事終った。確かに主は、19歳の青年の口を通じて語り、しかも雄弁に語られるのである。マックの家族は皆、この宣教師たちに強い感銘を受けた。私の妻も、通りの向かい側に引っ越して来たばかりの新しい家族を招待していた。その結果、私たちはその2家族と一緒に私の家の居間に集まり、宣教師から伝道のレッスンを聞いたのであった。

集会は毎週木曜日の夜行なわれ、6週間続いた。3回目のレッスンが終ったとき、この2家族ともバプテスマを受けるよう勧められた。その結果、私はマックと彼の妻ベティーと彼らの娘ふたりにバプテスマを施す機会が与えられた。私たちはマックを教会の会員として確認し、その後、教師の職に聖任した。私はマックに、正しい生活を送ったら、彼の息子のボブにバプテスマを施すことができるようになる、と話したことを覚えている。ボブはあと9カ月でバプテスマを受けられる年齢に達するのであった。このことはマックの心を動かした。彼は自分の家族の霊的な指導者でありたいと願っていた。当然のことながら、私はこれまで家族の指導者でありたいと願わない男性に会ったこともなければ、そんな男性を知りもしない。これは神が与えて下さった権利なのである。

それでマックはよく準備をして、実際、9カ月後に息子にバプテスマを施した。息子にバプテスマを施してから間もなく、彼は長老に聖任され、またステーク部宣教師に召された。マックはステーク部宣教師になって1年目に、28人にバプテスマを施した。彼には町中に友人がいた。その友人たちを訪問しては、一緒にバプテスマ会に来るように勧めた。バプテスマ会の特別な雰囲気を感じて欲しかったのである。私は彼がその友人を「求道者」として紹介しているのを聞いたことがある。彼の友人たちは、求道者とはどういう意味かさえ知らなかったが、とにかく彼らがバプテスマ会に出席した人々から皆、特別な待遇を受けたことは確かである。確かに教会にはじめて出席した人々は、教会員の愛と特別な関心とを感じる必要がある。

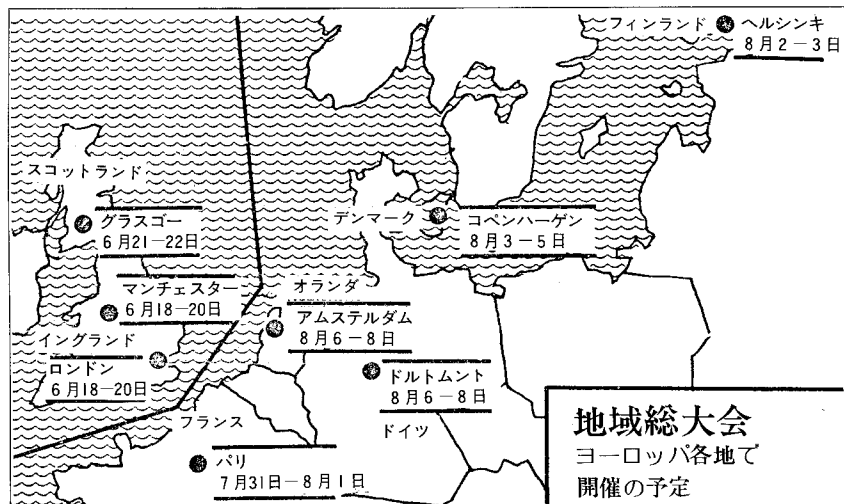
マックは今なお、友人や知人を教会に連れて来ている。彼と家族が改宗した15年前から現在まで、彼は個人的に112名の人々にバプテスマを施し、教会へ導いた。彼は今不

動産業を営んでいる。そして仕事を通して、家を買いたいという良い家族と知り合いになると、何とかして自分のワード部内に住まわせようと努力する。彼は、家屋の売買に関しては極めて正直であり、これには一様に皆が感謝している。そして引っ越しの時が来ると、マックは監督を通じて、ワード部神権定員会に引っ越しの手伝いを要請するのである。近くに住む末日聖徒たちがその家に食べ物を運んで来る。近隣の学校、商店街、バス時刻表などの紹介、何か役立つものの持ち込み、新聞の配達、これらが皆、マックの要請に従ってその地域に住む七十人定員会の会員を通じて行なわれる。その新しい家族が教会に通い出す頃になると、マックは当然のことに彼らを連れて教会へ行き、近くに住む友人たちを紹介する。こうして短期間中に、新しい家族は改宗の奇跡を体験し、バプテスマを受けるのである。

マッコイ家族全体に、またとりわけマック自身にどんな変化が起ったのか眺めてみることは、極めて興味深いことである。第1. マッコイ家族は現在、永遠の家族の絆で結ばれている。イエスがペテロに与えたと同じ権能により主の宮居で今も永世にも結び固められたからである。彼らは地上で結ばれているばかりでなく、天でも結ばれているのである。マックは今なお彼の家族を管理している。しかも今は、説教と優しさと親切と偽らざる愛とによって管理しているのである。

第2. ふたりの娘は共に神殿で帰還宣教師と結婚した。第3. 長男のボブは、主イエス・キリストの使いである専任宣教師として、現在伝道中である。第4. 次男のスティープも間もなく伝道に出る予定である。第5. 5番目の子供ティナが生まれた。これは、マックが教会員になったことによる特別の祝福である。彼が、創造の目的と計画を知ったからに他ならない。第6. マックは現在大祭司でワシントン神殿の神殿職員として働いている。第7. マックはここ8年間早朝セミナーを教えており、バージニア州北部に住む何百人という若い教会員の生活に影響を及ぼしている。第8. 私はマックが証会で次のような証をするのを聞いた。現在彼は、前の教会に1年間で納入していた金額よりも多額のお金を毎月この教会に納めている そうである。

人は主が自分に望んでおられることを知ったとき、どれほどのことをするであろうか。驚くべきことである。私はそれがだれであってもよい。もしあなた方がだれかに、主がその人に対して望んでいることを教えてあげ、その人自身がそれを知ったならば、彼は是が非でもそれを行ないに表わしたいと思うことであろう。私はこれが真実であると信じている。すべての人々が同じ天父の子供だからであり、私たちは皆同じ刺激には同じような反応を示すからである。マックはかつてのマックではない。改宗しているからである。これは、神の王国の一員になるためにどうしても必要な資格である。そして最後まで耐え忍ぶことにより、永遠の生命を受けるための保証を得るのである。私たちが皆永遠の生命を受けることができるよう、切に願っている。



大管長会は、1976年の夏に、大英諸島、ヨーロッパ、スカンジナビア、フィンランドの各地で地域総大会を開く予定である。

6月にはイングランドのロンドンとマンチェスター、そしてスコットランドのグラスゴーで、8月にはフランスのパリ、フィンランドのヘルシンキ、デンマークのコペンハーゲン、ドイツのドルトムント、そしてオランダのアムステルダムで開かれる。

地域総大会は、4月と10月にソルトレークで開かれる総大会に出席できない教会員が教会の幹部指導者をより身近に感じることができるようにとの配慮から企画されるものである。

マンチェスターでの大会は、これで2度目である。1971年、初の地域総大会が開かれたのは、このマンチェスターであった。以来、メキシコ、南アメリカ、ヨーロッパ、スカンジナビア、フィンランド、極東で、多くの大会が開かれた。この企画はさらに進展を続け、先に発表された通り、オーストラリア、ニュージーランド、南太平洋諸島で一連の大会が開かれることになっている。

大会はすべて大管長会の指示のもとに、十二使徒評議員会から数名とその他の教会幹部が出席して開かれる。

大会には、一般大会、父親と息子のための神権者大会、母親と娘の集会、文化プログラムがある。

現在大英諸島の末日聖徒数は、約75,000名であり、英国内には17のステーク部と7つの伝道部がある。

ステーク部、伝道部等の所在地は、ロンドン、バーミンガム、ブリストル、ハダーズフィールド、ハル、イプスウィッチ、レスター、マンチェスター、ニューカッスル(アンダーライム)、ノッthingam、レジン、ラムフォード、サウスハンプトン、サンダーランド、リーズ等である。

アイルランドのベルファースト、スコットランドのグラスゴーとエジンバラ、ウェールズのマーサーチドフィールドにもステーク部がある。

ヨーロッパ大陸の教会員数は約56,000名である。ドイツには、ベルリン、デュッセルドルフ、ハンブルグ、カイザースラウテルン、ステュットガルト、ドレスデン、フラン

クフルト、ミュンヘンなどに7つのステーク部と13の伝道部があり、他にもスイスのチューリッヒとジュネーブ、フランスのパリとツールーズ、オランダのハーグとアムステルダム、ベルギーのアントワープとブリュッセル、オーストリアのウィーンに伝道部やステーク部がある。

また、スカンジナビアにも16,000名の教会員がいる。デンマークのコペンハーゲンとスウェーデンのストックホルムにはステーク部があり、コペンハーゲン、ストックホルム、オスロ、ヘルシンキには伝道部が組織されている。

1837年7月、最初のモルモン宣教師が英国のリバプールに到着した。1838年にはスコットランドで伝道活動が始められ、1840年にはウェールズとアイルランドとマン島に教会が組織された。

英国における教会史上の圧巻は、イーストグリンステッド近郊のリングフィールドにあるロンドン神殿の建設である。ロンドン神殿は1958年に完成し、献堂された。

スカンジナビア諸国に対する伝道は、1850年に始められた。その頃はスカンジナビア伝道部ひとつしかなかったが、1905年にスウェーデン伝道部が分かれ、1920年には元のスカンジナビア伝道部がデンマーク伝道部とノルウェー伝道部に分かれた。1947年には、フィンランドにも伝道部ができた。

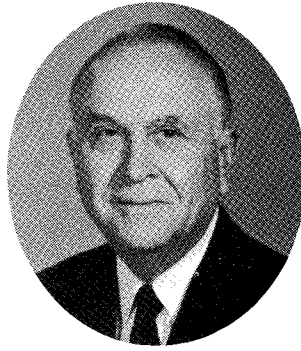
ヨーロッパ大陸への伝道は1850年にフランス、イタリア、スイスで開始された。また、1851年にはドイツで、1861年にはオランダで、1888年にはベルギーで正式な伝道活動が始められた。

1955年、ツォリコーフェンにスイス神殿が完成した。教会の公式の発表によれば、近くシドニーで開かれる地域総大会の一部が第9チャンネルのテレビジョン・ネットワークで放送される予定である。

大会はシドニーのオペラハウスで行なわれ、2月29日、日曜日、午前10時より放送される。パース、メルボルン、ブリスベン、アデレード、キャンベラ、ノーバート、その他のオーストラリアの都市で、この放送を見ることができ



### 十二使徒評議員会 会員に召される



1月9日、金曜日、大管長会は1970年4月6日以来十二使徒評議員会補助の任にあったデビッド・ブルース・ヘイト長老が十二使徒評議員会会員に選任されたことを発表した。

これは、1975年12月2日、ヒュー・B・ブラウン長老の死去によって空席となった十二使徒評議員会の席を満たすものである。

長老は「チャーチニュース」の記者に次のように語っている。「木曜日、ある集会に出席しているときに、私の秘書がやって来て、『キンボール大管長が電話をくれるように、とのことです』と申しました。神殿内だったので、早速電話を差し上げますと、話したいことがあるので、すぐ来てくれないかということでした。

大管長は神殿の廊下で待っておられ、私たちは部屋に入って話しました。大管長は私の手を取り、じっと目を見て、温かい確信に満ちた態度で召しのことを話されました。

私は、自分が大いなる人の前にいることを知っていました。そして私の前におられる方が予言者であることに疑いを持ちませんでした。驚きもし、私にはそのような資格はないとも思いました。私はまだ一度も教会の地位を望んだことはありませんでした。以前に、主の召しは必ず受けようと決心したからです。教会で働く素晴らしい人々のことを考えると、なぜ私が選ばれたのだろうかと不思議に思いましたが、予言者のなさることに疑いを持つてはいませんでした。

私たちは十二使徒の方々が集まっておられる部屋に行きました。口では言い表わすことのできない経験でした。私はそこで使徒に召され、十二使徒評

議員会会員に聖任されました。」

翌日ヘイト長老はソルトシーク・シティーを立ち、東海岸で開かれたステーク部大会を管理し、軍人の大会を開いた。

ヘイト長老の召しについては、4月の総大会で支持がとられるほか、世界各地で開かれる1976年度第1四半期ステーク部大会で支持がとられる。

過去数十年間で総大会以外のときに十二使徒評議員に指名されたのは、ヘイト長老を除いて3名、すなわちスペンサー・W・キンボール大管長とエズラ・タフト・ペンソン十二使徒会会長が1943年の夏、マービン・J・アシュトン長老が1971年12月3日に召されている。

ヘイト長老の幅広い経験と実績は、十二使徒評議員会に多大な貢献をすることであろう。長老は、神権定員会、メルケゼデク神権MIA、ホームティーチング、家庭の夕べ、指導委員会、軍関係を含むメルケゼデク神権の実務部長である。

また、かつては成人コーリレーション委員会の副委員長、神権指導委員会および教師養成委員会の実務部長としても働いた。

1972年には、軍人関係委員会の実務部長に召されている。

ヘイト長老は幹部として召される前には、十二使徒会地区代表として、その務めを果たしていた。また、ユタ州プロボのブリガム・ヤング大学の副学長でもあった。

十二使徒会地区代表に召されたときは、中央の神権伝道委員会の委員であった。1963年から1966年まで、スコットランド伝道部の伝道部長の任にあり、その前は12年にわたってカリフォルニ

ア州パロアルトステーク部のステーク部長を務めた。また副監督、パロアルトステーク部高等評議員として働いたこともある。

ヘイト長老は1906年9月2日、ユタ州との境に近いアイダホ州の農村、オークレーで生まれた。そして成長し、「小さな町で、満ち足りた生活」を送った。

彼の祖父ホートン・デビッド・ヘイトは、昔、教会の要請を受けて家族と共にユタ州のファーマントンを離れ、オークレーに入植し、アイダホ州南部で監督として働いた。

また、ヘイト長老の父ヘクター・カレブ・ヘイトは銀行家であり、15年間オークレーワード部の監督を務め、1916年3月、長老が9歳のとき世を去った。

ヘイト長老はアイダホ州アルビオンにあるアルビオン州立師範学校に通い、教員免許状を取得、大学へ行くための資金を得た。

19歳でユタ州立大学に入学し、1928年に経営学学士号を得て卒業した。

またヘイト長老は1930年、24歳の誕生日の2日後に、ソルトレーク神殿でラビー・オルソンと結婚した。新婚旅行は、車でカリフォルニア州のバークレーに行き、その地で、ソルトレークに本店を持つある百貨店の支店長になった。

バークレーに着いて間もなく、長老はサンフランシスコステーク部日曜学校副会長に召された。

長老は社会にあって、次々と重責を果たした。

1933年にはソルトレーク・シティーに帰り、ZCM I（ソルトレーク・シティーにある大百貨店）の雑貨部門の

支配人になり、その4年後、カリフォルニア州サンディエゴにあるモントゴメリー・ウォード（大チェーンストア）の地区支配人になって、25の店の経営を監督した。

また、1943年には海軍士官となり、西海域で海軍物資供給艦の艦長として働き、チェスター・ニミッツ海軍提督から表彰を受けている。

終戦後はモントゴメリー・ウォード社に戻り、シカゴ地区支配人として165の店を管理した。

1951年には、カリフォルニア州パロアルトで、4つの小売店を持つパロアルト金物会社を起した。

また、パロアルト在住中には市議会議員に選ばれ、2期間にわたって市長を務めたが、1963年、伝道部長の召し

を受け、辞任した。

夫妻には3人の子供がいるが、いずれも結婚している。

ヘイト長老が歩んで来た人生は、達成と報いに満ちたものであった。この新任の「キリストの特別な証し人」の前途には、数多くの胸躍するような、チャレンジに満ちた責任が待ち受けていることであろう。



東京第4ワード部  
吉田 洋子

## 「神さまが生きている！」

冬のある朝、二十歳のとき

「二十歳にもなって乳液もつけないで」と母から言われた

「お姉ちゃん、もっとまじな服着なよ」と妹から言われた

「高校卒業したらうんとおしゃれして、化粧して、きれいになって楽しむんだ」

これが私の口ぐせだったのに、今の私には考えられない

私は洋服を買うのがとても好きだった  
いろいろと替えて楽しむのが好きだった

でも、今の私にはそれができない

あるひとつの出来事が私の青春を変えた

「神様が生きている！」

このたった何文字かが奏た美しいハーモニー

心が燃えた雨の日の裏磐梯

服も買いたい、化粧もしたい、外に出てうんと遊びたい

でも、私にはもっと大切なものができてしまった

「神様が生きている！」この真実をみんなに知らせたい

苦しんでいる人、困っている人、不幸な人、だれでもいい、私のこの気持ちを伝えたい  
そのためには

青春を捧げても悔いはないの

化粧するお金でそれができるんだったら

洋服を買うお金でそれができるんだったら

遊ぶ時間でそれができるんだったら

私はお金を、時間を捧げます

なぜって

洋服より、化粧より、遊びより

私の心を満たしてくれるから

この詩の作者、東京第4ワード部の吉田洋子姉妹は、現在、フルタイム宣教師として日本仙台伝道部で伝道中。伝道前はモデルクラブに籍をおき、日本テレビの連続ドラマへの出演が内定していた。

### 告知板

末日聖徒イエス・キリスト教会が  
NHK総合テレビに！！

日時：3月31日（水）夜7時半～8時

内容：アメリカ人と宗教「祈りある生活」

\*当教会の紹介は約7分程度です。

家族、親戚、友人、知人にもお知らせ下さい。

## 久保家族の改宗

この記事は「われ島人<sup>わが</sup>人を愛す」その他の著作で有名な鹿児島支部の牧哲也兄弟が昨年、御寄稿いただいたものを原文のまま掲載したものである。

日本の九州本土と琉球沖縄島の間あたりに、奄美大島という美しい島がある。この島の中心都市名瀬市は人口約4万5千人、ここに20人ぐらいの末日聖徒がおり、活発に働いている。ことしの春(3月21日)バプテスマを受けた久保家族について紹介してみよう。

久保兄弟姉妹は先祖三代にわたるカトリックで親族もほとんど全部が信者である。彼らは生まれて50有余年、カトリックこそが唯一の教会という観念のもとに育って来た。また事実彼らは名瀬の教会で中心的存在でもあったのだ。

数年前から、ここ名瀬の地に若い外人の二人連れを見かけるようになったし、モルモン経という本についてのうわさ話も耳にししたが、彼らがこれを問題にするようなことはほとんどなかったといつてよい。なぜなら、カトリックこそが絶対であったのだから……。

2月の或る日、彼らの経営する薬局の店頭に、モルモンの宣教師が立ったとき、彼らは当惑の色をかくせなかった。「私たちに何の用があるというのだろうか?」

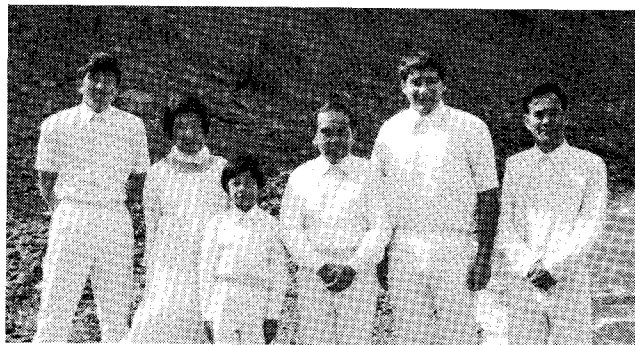
しかし、宣教師たちは熱心だった。また彼らがひじょうに清らかで、魅力的なふん囲気をたずさえていたから、久保姉妹はこの二人の若者をすぐ立ち去らせることはできない、と感じていた。御主人は目で制したが、彼女は「ちょっとだけ」と彼らを家の中へ招じ入れた。「深入りしてはたいへんだ」という気持はあっても、彼らの語る明快なメッセージは、彼女をひきつけて放さなかった。モルモン経も読み始めた。

2回目の訪問のとき、兄弟は「こんどまで」と許した。3回目のとき、兄弟は断わろうと思って姉妹を見た。しかし姉妹の哀願するような眼差しの真剣さに、彼はもう何も言うことができなかった。

久保姉妹にとって、眠れぬ夜が続いた。「私はカトリックを捨てるか。愛情深い親戚の方々から離れることができるだろうか」と苦しんだ。「神さま、それでも私は改宗すべきでしょうか!」涙と祈りの日々であった。

御主人にも話した。問うた。彼はじつと耳を傾け、自らもモルモン経を手にするようになった。「驚嘆とはこのような気持をいうのだろう。全く恐ろしい本であった」と後に彼は述懐している。「もしこれがほんとだったら、いままでの私は何であったのか」まさに胸先にアイクチを突きつけられた思いだったのである。

妻がバプテスマを受けた後で、自分はゆっくり研究してからでも遅くないと考えていたのが、ぜひ一緒にという気持ちに変わった。妻一人を周囲からの攻撃にさらすことはできない、という思いも働いた。「妻の行動には夫も責任を持つべきだ」という彼の信念が、モ



ルモン経の探求へと彼をかりたてた。「主人の方がかえって一生けんめいになりました」と久保姉妹はうれしそうに回想する。

食るように読んだ。熟考し、祈った。「モルモン経は、真実神からの本である」と彼は答えを得た。

或る夜、地震のどよめきの中に、彼らは「バプテスマを受けよ」という御霊の声に胸を刺し貫かれた。二人はともに、そして10歳になる一人息子を入れて、三人は奄美の美しい海でバプテスマを受け、主の教会の群れに加わった。

久保芳子姉妹は述懐している。「私はこの一年ほどの間いつも神さまにこうお祈りしていました。『神さま、私たちは何もほしい物はありません。お金、財産、地位、名誉、そんなものは何もありません。ただ、神さまの真実が知りたい。永遠に変わぬ絶対の真理がほしいのです。どうぞ、それを与えてください。そして私たちはそれを娘と息子に対して、親からの唯一の遺産として引き継ぎたいのです。』狂おしいほどの祈りに主は、とうとう応えてくださいました。やっと安心しました」と。

久保信義兄弟は9月に行われた地方部大会の席上、つぎのように証しされた。「60年に近い歳月ののちにやっと真理を得た。真理は全き平安と自由をもたらしました。モルモン経は恐ろしい力を持った本である。私は、この本が真実であると知ったとき、すべての過去のきずなを断ち切る勇気が出てきました。私は最上の選択をすることができ、これ以上望むものではありません。私は酒や煙草の悪習を長い間、断つことができなかったが、家族そろってバプテスマを受けようと決意したその日から、何の苦もなく、それらを断つことができました。以前から知恵の言葉に慣れ親しんでいたかのように、ごく自然に楽々と、いましめを守ることができたのです。確かに主は導きたまい、力を添え、助けてくださるとわかります。

それからの日々、私はかつて味わったこともない健康感にあふれ、若々しい希望にいつも喜び一ぱいの生活です。ほんとうにこの年になって主は真の喜びの訪れをもたらしてくださいました。ここまで来るまでに心をくだいてお導きくださった宣教師や兄弟姉妹の愛に心から感謝しています。

そして最後に、主はまごころから願い求める者には、必ず応えてくださることを証しいたします」と。

彼や久保家族は、この福音の喜びを、彼らが与えられたように、こんどは世の多くの人々にこれを分かち与えようと、日々祈って選民を探し求めているのである。



スペンサー・W・キンボール大管長は  
3月28日、81回目の誕生日を迎える